

アイドルマスターシンデレラガールズ～花屋の少女のファン1号～

メルセデス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

芳乃和也は学校から帰る途中、ある場面に遭遇してしまう。遭遇した場面には、同じクラスになったばかりのクラスメイトが見えたため、見捨てるわけにもいかず、関わることから物語は始まっていく。

タイトルは仮の決定で、良いのと思いつきませんでした（泣）
作者はこれが初投稿作品であり、読みにくかったり文章が変だったりするかもしれません。

基本的にアニメ準拠の流れで進んで行く予定です。

オリジナルの話もある：かもしれません。

※2018年6月12日 第10話、活動報告更新

目次

第1話	1
第2話	5
第3話	10
第4話	16
第5話	25
第6話	34
第7話	42
第8話	55
第9話	64
第10話	75
第11話	84

第一話

高校の始業式から数日、学校の授業が終わって、いつもの帰り道にそれは起きた。今日出された課題をさっさと片付けて時間を持て余そうと考えてた時だ。

「僕のロボットが〜!!」

ちようど、公園の前を通る道で子供の泣き声か聞こえた。

あゝ、おもちゃのロボット落として部品が壊れたのか。

俺も昔は同じことやったな：覚えてないけど。

視線を向ければ子供だけじゃなく、茶色の長い髪の毛の女の子が子供の隣に立ってる。：って、よく見たら、同じ高校の制服か。 大
方、心配でもして駆け寄ったのか？

まさか、子供を泣かせたってことはないだろう。

…ないよな？

「ちよつと君!」

横を通り過ぎていく警察官が二人：誰かが通報したのかそれともただ通りかかったのかは知らないが、これで大丈夫だろ。さて、帰って課題やるか…

「とりあえず、署まで来てもらおうか」

「え!! ちよつと!」

……おい。何故かは知らないけど、警察の方、完全に連行しようとしてる!?! せめて話くらい聞いてやっても良いだろうに。

警察に振り返る女の子の横顔が見えた。

あれ? 同じクラスのやつか…。 知らない人ならまだしも、

知ってるとなると見て見ぬ振りするのは、なんだか気分が悪い…。

決断した時は早かった。 俺は足早に三人の元へと歩き出した。

……今思えば、この時間帯にこの出来事に遭遇してなかったら、ここまでの関わりを持つことなんてなかったと思う。 面倒なこともあるだろう。

「ちよつと良いですか?」

まあ、後悔だけはしないのは確かだろうさ。

「なんだね？君は」

「通りすがりの学生ですよ」

めっちゃ怪訝な目で見られてる。いやまあ、関係のない人間がいきなり話しかけられたらそうなるのは分かるけども。まあ、今回に関しては彼女の関係者じゃないこともないが…まあ、置いてこう。

「話の経緯は聞こえてたんで知ってます。とりあえず、当事者から話を聞きましようよ？彼女は何もしてないって言ってるんですから」

「しかしだな…」

当事者は泣き止まない子供。警察官も話を聞こうとはしたのかもしれないが、それでも泣き止まないのか。となると、普通に話し掛けでもダメか。だったら、こっちに注目をさせれば良い。子供の両肩に手を乗せる。それだけで、子供はこっちを向いてくれた。…本当は無理にでも顔をこっちに向かせようとしたんだが、大丈夫だったか。

「ちよつと良いか」

「…うん」

まだ涙声だが、話くらいは出来そうなくらいに落ち着いてくれた。これなら話せそうだ。

「何で泣いてたんだ？ロボットを落としてどこか壊れちゃったのか？」

「うん。手がどこかいつちゃって…お姉ちゃんも…一緒に探してくれただけど、見つからなくて…どこにあるか…わからなくて…」

「そっか。じゃあお兄ちゃんも手伝うわ。ついでに、そこのおじさん達もな。こんなに人が多ければ、すぐに見つかるって」

勝手に警察の方も人数に入れたけど、まあ良いだろう。

彼女の迷惑料として、一緒に手伝って貰うさ。

まあ、探するのが五人ともなるとすぐに見つかった。

子供に手渡してやると、「お姉ちゃんもお兄ちゃんもおじさん達もありがとう！」と、満面の笑顔を見せて走って行った。まあ、子供の笑顔ってのは悪くないよな。

警察の方は、微妙な顔をしている。まあ、彼女には謝らないといけ

ないしな、仕方ない。彼女の方は…うん、あまり見ないようにしよう。こう、俺が見てはいけないような気がする。あれは、子供に向けてる笑顔だからな。良い笑顔してるよ、本当。子供が見えなくなった後、警察の方は彼女の方に向き直り、お手本通りのように頭を下げた。

「ご迷惑をおかけしました！」

「ああ…うん、別に良いよ」

彼女は彼女で、特に腹も立ててないらしい。警察の方は俺にも頭を下げてそのまま職務に戻っていった。まあ穏便に済んで良かったか。

「災難だったな」

とりあえず、一言声を掛けておこう。何かこのまま別れるのも気まずい。同じクラスなのは間違いないが互いに話したこともない。

「うん…。二度も体験はしなくて良いかな」

「なかなかないとは思うがな。ま、それにしても穏便に終わって良かったな、渋谷」

そう、彼女は渋谷だ。フルネームは…渋谷凜だったはず。

名前を見た時に、名前の通り凜としてる、というのが第一印象だとは…恥ずかしいから言いたくない。

「えっと…」

「一応、同じクラスの芳乃だ」

「……………ごめん」

ま、覚えてないのも仕方ない。話したことないんだから。

まだ高校が始まって数日だ。同じクラスの奴でも名前と顔を一致させる方が難しい…と思う。話したことがあったり、そのクラスの学級委員長とかしてたら話は別だけどな。先に言った通り、渋谷とは話したことはない。

俺や渋谷が学級委員長とかしてるわけでもないしな。

「別に気にしてない。俺が覚えてるのは偶然だったしな。クラスの半分も名前と顔が一致してるか怪しい」

「そっか」

「……………んじや、俺は帰るわ。これからよろしくな」

とりあえず一段楽着いたし、ここらで締めにするのが良いだろう。

お互い、もう話す事はないはずだ。渋谷に背を向けて、俺は一步を踏み出した。

「あの…ありがとう。それと…よろしく」

「……………ああ。じゃあな」

言われると思っでなかつたお礼を言われるのは嬉しい誤算というものだ。思わず、足を止めてしまった。ちなみに、返事をしたのは背を向けたままだ。……………別に振り返るのが面倒だったただけだ、正面から礼を言われるのが恥ずかしかつたわけじゃない。……………恥ずかしかつたわけじゃない。さて、家に帰って課題を終わらせませすかね。

第二話

渋谷と遭遇してからの翌日。今は学校に登校する途中だ。

まだ春先で、桜が満面に近い状態で登校するこの登下校の道を俺は気に入っている。桜が特別に好きってわけじゃないが、何かの花が咲いているのを見るのはいいものだ。

結局、あの後は特に何もなく、課題を終わらせ、余った時間でひたすらテレビを見ていた。内容はニュースだったりドラマだったり歌番組だったりで色々だった。昨日はテレビだけ見てたから、今日はゲームでもするか、と今日の家に帰ってからの予定を決めた頃には、学校はすぐ目の前だった。

「芳乃、俺は昨日数学の課題をやると言っていたな。あれは嘘だ」

「そうか。俺は今度はやらなかったら課題を見せてやらないと言ったな。それは本当だ」

「そこを何とか、何とか頼むよー!!」

教室に入って席に着いたと同時に、クラスメイトに手招きされ、何用かと思い近くまで行くと、頭を下げながら懇願するクラスメイトを目の当たりに、俺はゆっくりとそいつの席の隣に立った。いや、俺は彼に言ったのよ。自分で課題を取り組んで、わからなかったら教えても良いと。ただし、絶対にやってみろと。何も考えなくて答えだけ写すなんて愚の骨頂だ。自分で考えた後だからこそ、どこがわからないかの要点が掴めて、次回似たような問題に直面した時に解答に近づくんだから。何も手つかずだったらどこがわからないかわからないだろうに。……課題をやらなかった理由は、まあ予想がつく。

「部活動から帰ったら、765プロ出演の歌番組があったんだって！見るしかないだろ。課題とか手につかないだろ？仕方ないだろ？」

近藤直斗、こいつは恐らくクラスで一番765プロが好きなのだ。なにせ始業式の終わった直後にあった、クラス全員が初めて集結した際の自己紹介の時に堂々と765プロのファンと恥ずかしげもなく断言するほど765プロが好きなのだ。その時のクラスメイトの反応は…無言だった。担当の先生も数秒固まってたくらいだ。ただ、性

格も明るいし、リーダーシップがある。数日でクラスの人気者となるほどだ。しかも、サッカーは相当上手いらしく、上級生を凌ぐ勢いで、レギュラー候補ともなってるらしい。

「流石に連日だと俺も呆れるぞ」

「頼むって！今日は俺、絶対に当てられるんだよ！」

「……………次は絶対にやってこいよ。次は本当に知らないからな」

「すまん！何か恩を返せるものがあつたら絶対に返すから！」

「期待せずに待ってる。ま、この前も言ったけど本当に一回解いてみるよ。わからない時は教えてやるから」

こつちとしては、やってきた課題を見せるだけなので特にデメリツトはない。根は悪い奴じゃないから、その内自分で課題は取り組むだろう。課題の回答が書かれたノートを手渡した後、自分の席に戻ろうと顔を自分の席に向けたところで、彼女と目が合った。近藤直斗の後ろの席である、渋谷だ。

「…おはよう」

「お、おはよう、渋谷」

「…どうしたの？」

「別に。ちよつと考え事しててな」

「ふーん…。ま、いいけど」

声を掛けられるとは思ってなかったから油断してた、とは言えない。言ったら恥ずかしいしな。と、朝の始業を知らせるチャイムが鳴ったところで、じゃあ、と声だけ掛けて自分の席に戻る。さて、今日も1日の始まりだ。

「そういういえばさ、芳乃は昨日765プロの出る歌番組見てないのか？」

「見た。確か、如月千早さんの出る番組だったな」

「そう！いやー素晴らしかったよなー！絶対彼女は海外で通用するレベルだよなー！」

午前中の授業が終わった昼飯の時間。近藤を含めたクラスメイトと一緒に昼飯を食べる。TVはそれなりに見てるつもりだが、見てない日もあったり課題をしながらBGM代わりにすることもあるため、内容が頭に入っていない日もある。

基本的に近藤やクラスメイトが話を振るため、話を振る必要がなく、基本的には受け答えをすることが多い。

「如月千早もそうだけど、ミキミキだってハリウッドにいるんだぜ？765プロも凄くなったよなあ…」

「ミキミキはかわいいし、ハリウッドで彼氏作って、そのまま結婚ってことも…」

「おいやめろ、飯がマズくなるだろ」

今日の話は昨日TVに出ていた765プロが話題のようだ。と言っても数日の間に765プロの話題になったのは二度目。

ウチのクラスの男子の765プロ好きはそれなりにいるらしい。それに筆頭するのが近藤だろう。それを考えると、今後も765プロに関係するアイドルの話が出てくる可能性はあるかもしれない。まあ、特別変な話題じゃないから大丈夫だろう。

「近藤って、765プロの中で誰が一番好きなの？」

ふと、近くの席の女子が近藤に声を掛ける。後藤亜由美、近藤の所属するサッカー部のマネージャーだ。彼女は黒髪の短髪で容姿は整っており、マネージャーでありながらもサッカーは上手らしい。近藤がそう言っていたから間違いないだろ。

「そうだなーみんな好きだけど…やっぱあずささんかな」

「あずささんかー。綺麗だよね…すつごく」

「容姿だけじゃない、歌声も綺麗だしな。あの人と結婚出来たら幸せだと思っただよな」

近藤の一番好きな765プロのアイドルは聞いたことがなかったから新鮮だ。残念ながら俺はあずささん、と呼ばれる765プロのアイドルとしては知ってる。が、今ひとつ容姿を想像することしか出来ない。確か大人っぽかったとは思っけど。歌声自体は聞いたことあると思うが。

「やっぱりアイドルと結婚したいとかって思うの?」

「思うね。まあ、本当に出来るなんて思っただけだよ。そういうお前はどうかんだ? シュピターとかさ」

「カッコイイとは思うよ。でも、結婚したいとって言われると…微妙かな」

「そんなもんなのかね…。よくわからん…」

「簡単に言うと、実際に会ってみないと判断できないってことよ。カッコイイってことだけが、人を好きな理由になるわけじゃないもの」

近藤はどうもピンとこないらしく、唸っていた。ま、人を好きになる理由なんて色々あるだろうしな。確かに、カッコイイやかわいい、というのは男女問わず人に好意を持つ理由の一つだ。ただ、あくまで一つに過ぎないってだけだ。もちろん、それだけで良い人もいるだろうが、それだけじゃ良くないって人もいる。…かくいう近藤も、先ほど容姿だけじゃないと言っていた気がするけど、自分では気付かないって言うのがなんともだが。ま、俺が偉そうなことを言える立場じゃないから何も言わないけど。

今日の授業も終わり、放課後となった。今日も課題が出てるので、消化してゲームをしよう。

「あ…しまった」

…と思ったのだが、攻略に関して詰まってるんだった。

ネットで調べたら良いけど、攻略本的な何かを買うのが昔からの習慣となってる。本屋に買いに行くしかないか…。

攻略にもう数日は詰まってる上に、そろそろ先に進めたいし買いに行くか。

本屋の中に入ったところで、攻略本コーナーに行く前にふと雑誌が目に入った。それは数年前からアイドル事業を始めた美城プロの雑誌だ。美城プロダクション、歌手や俳優を多く輩出しているプロダク

シヨンで元々有名なプロダクションだ。会社の規模も相当に大きいと聞いたことはある。聞いたことがあるだけで見たことはないけども。

そして表紙に写っているのは城ヶ崎美嘉というピンク髪の……ギヤル……？ カリスマ、と書いてあるからギヤル達の中でカリスマなのか。そうするとファッションの流行とかも左右されるのかもな。……まあ、男の俺には関係ないが。

って、攻略本買いに来たんだっとな……危なく忘れるところだった。さっさと買ってゲームクリアしよう。

第三話

「ねえ、聞いた？ この辺、いま変質者がいるらしいよ」

攻略本を買って無事にゲームクリア出来て数日、クラスではそんな話が女子の中では話題になっていた。そしてその話を聞いたのが昨日。まあ、先生からの帰りの知らせでもそんな話はなかったから本当にいるのかどうかも怪しい。

あくまでも噂レベルの可能性もあるから、そこまで気にしなくても大丈夫か。変質者と行っても俺には関係ないと思うしな。……まさか、男も狙ってるとかそんな風なことはないよな……？ ……ないよね？ 考えていたら気分が悪くなりそうだから辞めよう。

今日は今日とて、スーパーに行つて食品の買い出しをしないといけない。朝、冷蔵庫を見たら見事に空だった。よつて昼飯の弁当も作れなかったため、朝から水だけで腹を膨らませている。近藤から分けて貰つても良かった（実際に言われた）が、遠慮したため、流石に何か食べたい。スーパーで食材を買い込んだ後に適当におにぎりかパンか買つて買い食いしながら帰るか。

スーパーを出た後、買物袋の一番上に置いていたメロンパンの封を開け、口に入れる。美味しい、メロンパンを久しぶりに食べたが、腹が減つてたこともあつて相当美味く感じる。これから昼飯時には事前菓子パンを買つて行くのも良いかもしれない。と、そんなことを考えていると桜の花びらが視界を横切つた。横切つた方向を見れば、それなりに敷地の大きい公園が見える。ちょうど俺が立っている場所が入口だ。公園の中には、子供とその母親であろう二人がいる。子供の遊んでいる楽しそうな笑顔。その姿を微笑んで見守っている母親の笑顔。母にも父にも遊んで貰つた記憶はないが、その時には俺はあんなに笑顔だったのだろうか。幸せだったのだろうか。それを確かめる術は、俺の思い出せない部分の記憶にしかない。

過去の写真があつて、それを見たなら確かめられるかもしれないが、それはあくまでも形だ。当時の記憶がどうか曖昧にしか思い出

すことしかできない。それで別に不満があるわけではないが。

「ワンワン！」

子犬が俺の横を通り過ぎようと走って行く。ここは公園の入口だ、その先は……………

「つとー！」

最終的な結論に至る前に、先に進ませないように買い物袋を慌てて放し、犬を抱きかかえる。この先は道路だ、車なんて通り過ぎようものならどうなるかわかったものじゃない。まあ、大丈夫だとは思うが何かがあつてからじゃ遅いからな。しかしこの犬、抱き心地が良い。首輪もあるし、飼い犬で手入れもしっかりされてるな。と、顔をこっちに向けた。ただ吠える様子はなさそうだ…つて、この犬どこかで覚えがある。花屋の犬と似てる気がするが…。

「ハナコ！」

「ハナコちゃん！」

叫び声に近い女性の声が入った。この犬の名前だろうかと思いつつ、いながら声がした方向を向いて…

「渋谷？」

「…芳乃？」

「…えつとく…」

見知った顔が一人と全く知らない女子が一人、こちらを見ていた。渋谷は私服、もう一人は制服だが、俺の知らない制服だ。なんだろう、同級生の感じがするけど、何故か違う気がする。とはい、年下でもないだろうし年上か？

…まあ、こんなことは今考えても仕方ない。とりあえず、犬を飼主の元に返そう。渋谷達の方を向けて地面に降ろすと飼主の方に向かっていく。飼主は渋谷の方だったらしい。

「…ありがとう」

「別に良いよ。たまたま通りかかっただけだ」

彼女は飼い犬の頭を数回撫でた後、撫でているそのままの表情でこちらを向いた。…こう、正面からお礼を言われるのはやっぱり気恥ずかしい。意図的に助けたわけじゃないし、俺じゃなくてもそうしただ

ろう。未だに、人からお礼を言われることに慣れない。

「あ、あの…卵が…」

「卵？」

渋谷の隣にいる女子が俺の方を向いて深刻そうな顔で言った。卵…？ ああ、さつき買い物したやつか。

「あ…」

「そういうば放した後のことを確認してなかったが、買い物袋を放した衝撃で卵パックが落ち、見事に割れていた。まあ、仕方ないか。そんなに高い物ではないし買い直せば良いか。」

「弁償しようか？」

「いいよ、そんな高い物じゃない。もう一回買いに行けば良いだけの話だ。…それに、話の途中だったんじゃないか？」

高い物だったら流石に弁償して貰いたいけど、卵1パックなら別に大した額じゃない。それに、二人でいるってことは何か話の途中だったのかもしれない。いや、そうじゃない可能性もあるけど。

「あ、そうなんです。えっと…凛ちゃんのお知り合いの方ですか？」

「渋谷のクラスメートの芳乃和也です」

「あ、凛ちゃんのクラスメートの方だったんですね。私は島村卯月です！よろしくお願いします！」

軽い自己紹介をしたら満面の笑みで挨拶を返されてしまった。なんだろう…こう…人を騙すようなことは出来なさそうな人だ。

「えっと…それじゃあ…芳乃さんに参考までにお聞きしたいんですけど…」

「ああ、どうぞ」

「凛ちゃんはアイドルになれますよね？」

…はい？ 渋谷がアイドル？ とうの渋谷も溜息混じりの粹を吐いていた。若干頬が赤くなってる気がするが…。

とりあえず、すんなり終わりそうな話ではなさそうさ。

何にしても、どうしてそうなったかを知りたい。

「…………唐突過ぎてついていけないので、状況を説明して欲しいんですが…」

「あ、すいません。あそこのベンチに座っているプロデューサーさんが、凜ちゃんをスカウトしようとしてて…」

島村さんが指差した方向を見るとスーツ姿の人がベンチに一人で座っている。身長が高いし身体つきが良さそうだな、喧嘩毎になつたら勝てそうもない。

「それで凜ちゃんはまだ…その…どちらかと言うと否定的で、でも…私としては、もう一緒にアイドルを目指せる仲間だと思つてて…。それで、凜ちゃんの知り合いの芳乃さんに、どうなのかなつて聞いてみようと思ひまして…」

「ようするに、渋谷がアイドルになることについてどう思ふかってこと…ですか」

「はい。少なくとも、今日初めて会つた私よりは、凜ちゃんと触れ合つた機会が多くて、私よりは凜ちゃんを知つてる人からしたら、どうなのかなつて…」

「とは言つても…俺も渋谷とは数えるほどしか話したことはないですけど…。それでも良い、つて言うならお答えしますが」

「私はお願ひしたいです！」

よつほど、第三者の意見というのが重要らしい。さて、言うことを考えながらも頭の本人に一応聞いとかないと。

「渋谷も、それで良いか？」

「私としても、アンタがどう考えてるかは気になる…かな。ちゃんと答えてくれるんだよね？」

「こんな状況で嘘を言つても仕方ないだろ」

渋谷は俺の言葉に頷いた。…期待されてる？それとも単純に気になるだけか？

まあ、どちらにせよ思つたことを言うだけだ。考えは…ある程度は纏まつている。ただ…本人の前で言うのは恥ずかしいが、仕方ないか。

「なれるさ。渋谷ならアイドルに」

「……………は、はつきり言うんだね」

「嘘を言つても仕方ないつて言つたら。まあ、渋谷に限らずなんだが、

誰にでもアイドルなんて慣れる可能性はあるって俺は思う。346
プロの城ヶ崎美嘉…っていうアイドルはそれこそ良い例だ」

「知ってますー！えっと…カリスマガールって呼ばれてる方ですね」

「そうです。彼女と765プロのメンバーのアイドルを比べてみても、特徴的には全く違うんです。そういった意味では、アイドルに決まった形なんてない。それこそ、島村さんや渋谷だつて違います。それぞれ個性を活かしたアイドルになれると俺は思います」

個性なんて十人十色だ。ドツペルゲンガーだのいるかもしれないが、タイプが、似てる人間はいるだろうが全く同じ人なんていないだろう。

「ま、今のが俺の意見だ。後は渋谷本人がどうするかだ」

意見は述べた。後は本人次第だろう。本人にやる気がない状態で続けても仕方ない。それなりの心構えは必要だろう。そのためには、今ここで即決するのは難しいと思う。

「…………とりあえず、一旦解散した方が良いんじゃないか？　今ここで決めることが出来る問題でもなさそうだし、落ち着いて考えた方が良いだろう」

「…そうだね。ごめん卯月、今すぐには決められない。

明日で良いかな？　一日、ゆっくり考えてみるよ」

「はい！大丈夫です!!　プロデューサーさん!!」

島村さんが向こうのベンチにいる大柄な男性を手を振って呼んでいる。男性も島村さんに近づくと、現状報告を島村さんから聞いている。…しかし改めて近くで見ると大きいな…身長は2メートルはありそうだ。

「わかりました。渋谷さんにも考える時間は必要でしょう」

男性が頷くと、渋谷の方に振り向く。…目つき怖っ。

「渋谷さん、最後に一言だけ、よろしいでしょうか？」

「…うん」

「…………少しでも、君が夢中になれるなにかを探しているのなら……一度、踏みこんでみませんか？」

「そこにはきつと、今までと別の世界が広がっています」

…確かに渋谷は部活動に入っていない。そう言った意味では夢中になれるものがないのかもしれない。人の趣味など様々だ。それこそ、部活動ではなくとも夢中になれる何かがある人もいるだろう。だが、この男性は言い切った。

つまり、渋谷には今、夢中になれる何かがなく、探している途中だと確信しているようなものだ。良く言えば、良く見ている。

悪く言えば、ストーカーか…？

「じゃあ、俺は帰るな」

話もひと段落ついたし、後は解散だろう。俺がこれ以上、ここに居る理由もないし帰るとしよう。

「芳乃さん、今日はありがとうございました！」

島村さんはお手本通りの笑顔で挨拶をしてくれる。眩しい。

「いや、大したことしてないですから。島村さんもアイドル頑張ってください。渋谷も、また明日な」

「うん」

渋谷にも軽く挨拶をして家の帰路へと歩いていく。プロデューサーと呼ばれていたあの男性にも頭を下げた。律儀にも礼を返して貰ったが、大したことはしてないので申し訳なかった気がする。

何にせよ、長い1日だった。帰って課題でもするか。

……結局、卵を買い忘れたのを家に帰る直前で思い出し、また買いに出たなんて言うまでもない。

第四話

翌日。

授業が終わった放課後。

とある場所へと向かう。行きつけの店…と言つてもおかしくはないが、男の俺が行くには少々意外に思われるかもしれないお店だ、自分で言うのも何だが。クラスの全員もそうだが、友達でさえこの事を知っている人は少ない。

近藤辺り知られるとなんか面倒そうではあるしな、なんとなくだけど。

「あら、芳乃君。いらっしやい」

と、店の前にいた女性に声をかけられる。たまたま店の前に出てたらしい。年齢を聞いたことはないが、若く見える方だ。

「どうも、お世話になってます」

実際、この店に寄るのは一度や二度ではない。本当に世話になってる。寄る回数も、月に最低二回、多い時は週に一度は通うくらいだ。まあ、通い始めたのは一年前くらいからだ。視線を店の中に向けてると、見えるのは…多くの花。

「今日は…何か目的があつてきたの？」

「そうですね…。母親のと、あと雑談を」

「…なるほど。じゃあ準備するから少し待っててね」

そう、芳乃和也は花屋に来たのです。…誰に語りかけてるわけじゃないが、こういう風に言わなきゃ恥ずかしい。

自分のこととなると、無駄に恥ずかしくなる。他人を褒めたりするのはどうにでもなるんだがなあ…。

話を戻そう。基本的に花は選んで貰っている。自分で選ばないこともないが、選んで貰った方が彩りが綺麗だ。

「そういえば、芳乃君も高校生だったかしら？」

「そうですよ。今年高校入学したばかりですけど、どうかしました？」

「ウチの娘も今年から高校生なのよ。部活も何もしてなかったけど、今年になって思つてもなかったことをやるようになってね」

「そうなんですか…」

思ってもなかったこととなると、部活ではなくアルバイト、ということもないだろう。高校生になったばかりの同級生がやる親の想像もつかないことってなんだろう…？

反応を見るに悪いことではないだろうが…。

「まあ、娘にはまだ恥ずかしいから知り合いにも話をしたらダメだって言われたけどね」

「それだったら、僕も何をしようとしてるのか聞いてしまったらダメですね」

「あら？ 気になったの」

「それは気になりますよ。ここまで前振りされたら誰でも気になりますって」

さつきから考えてはいるが、全くわからない。正直、お手上げだ。…これ以上追求するのも負けた気がするし、辞めよう。

「正直、当てるのは結構難しいとは思うけどね。やると決めたからには、きちんと筋を通す子だし、そこらへんは心配は…あ、帰ってきた」花をほぼ選定し終わった時にちょうど話の元となった本人が帰って来たらしい。…ということはこの話もここで打ち止めだろう。知る機会もなくなるだろう。

「ただいま、お母さん」

…？ 気のせいかな、聞いたことのある声な気がするが。

と、同時に店の奥…家の方から犬が飛び出してきた。

…あ、昨日会った犬だ。そうだ、花屋で見たことあるって思ってたからついでに聞こうと思ってたんだ。 あれ、俺の足元に寄り添ってきた。

「ハナコ、芳乃君にも懐いてきたのね」

素直に懐いてくれるのは嬉しいことだ。ただ、今は少々焦っている。情報を整理すると、ハナコが花屋から出てきたということはこの家に住んでる、ということだ。そのハナコとは公園で昨日会っている。ハナコが単純に出歩いていただけではなく、誰かに連れられている。それは誰だったか。つまり…今、俺の後ろにいるのは………

「高校生の男子が一人で花屋にいるのって、初めて見たよ」

俺と同じ高校で、同じクラスで、最近何かと縁がある異性、渋谷凧がそこにいた。ちなみに、まだ後ろはまだ振り返ってない。どんな表情したら良いかわからない。

「あら、二人とも知り合い？」

渋谷の母親が俺達を交互に見ている。何だか不思議そうに見てるな、何か珍しいのだろうか。…そして何故だ、嫌な予感がある。

「…知ってるも何も…同じクラスだから」

「それにしたって、男の子の友達は珍しいじゃない？」

「最近、何かと縁があつてね」

「友達つてことは否定しないのね…？」

「…お母さん…」

「あら、怖い怖い」

親子間で娘をからかう母親。一般的にあるかもしれないけども、渋谷さんや…俺越しに睨まないで。いや、表情見えないからわからないけど、睨んでる気がする。俺は睨まれてないと思うけど睨まれてる気分だ。

まあ、実際聞かれたら困ることではある。友人、という定義がどこまでのものかにもよるのだが。俺自身、渋谷との現在の関係が友人かと聞かれると…どう答えるべきか。

「芳乃君、凧はクラスではどんな感じなの？」

「ちよつとお母さん！」

本人を目の前…じゃなくて真後ろにいる状況で話せと？

いやこれ、渋谷も恥ずかしいだろうけど、これは俺も辛い。昨日も、島村さんと渋谷を目の前にして似たようなこと言ったけどさ。ただ、ここで逃げてても良いが、今度またこの店に来た時にどうせ同じ事を聞かれるなら今ここで話した方が良いのか…。

「特に変わったことはないと思います。異性の友人は知りませんが、同性の友人は既にいるようですから。孤立してるということもない…と思います」

当たり障りのない答えで言つたつもりだが…どうだ？

あくまでクラスの中で渋谷を見ただけの感想だ。特に本人にも悪い内容ではないだろ、顔は見えないが。どんな表情してるのか、見てみたい気もしなくはないけど。

渋谷の母親が、なるほどね、と頷いている。

「クラスで凧と話したことってある？」

「いえ：朝の挨拶をされたことはありますけど、クラスの中で話したことは……」

「へえ〜：なるほどね」

……渋谷の母親が凄く悪い笑顔だ。視線は自分の娘の方を向いている。……これは、マズいか、やってしまったのか。

娘に向けていた視線を、表情はそのままどこちらを向いた。

「芳乃君、私知ってる中で、凧が同年代の男の子と会話するのって、初めてに近い……というか、初めてと言っても良いくらい見た覚えがないの」

十数年間育ててきた親が言うなら、その情報は間違いないのだろう。

「そんな凧が、朝の挨拶を自分から異性にするなんてよほど珍しいと思うのよ。愛想が良いとは言えないじゃない？」

だから、男の子に限らず、印象を良く思っていない人もいるんじゃないかって思ってたね」

……：ノーコメント。ノーコメントで。

「今の芳乃君の話を聞く限り、クラスの中じゃなくて、放課後で話さきっかけがあつたんでしょう。しかも今日も凧から芳乃君に話しかけるくらいだから、数回話す機会があつたのね」

完全に墓穴を掘つたな、これ。目の前の人嬉しそうだからまだ良いけど。

「芳乃君」

「……：言いたいことはなんとなくわかりますが、なんででしょう？」

「凧の初めての異性の友達に一番近いわ。よろしくね」

選定し終わった花を俺に渡しながらそう言われた。

ですよねー、そういうことですよねー。自覚はなかったけど、そう

思われても仕方ない。反対の立場だったら俺でも結論がそうなると思う。でもそんなはつきり言わなくても良いと思うのですが。しかもよろしくって。

そしてタイミングが良いのか悪いのか、店の奥で電話が鳴った。

「ごめんね芳乃君、ちよつと電話に出てくるから」

当然のように電話を取りに行く。そして残されたのは、同年齢の二人。近くにいるのに、まだお互いに顔も合わせてない上に、沈黙。体感時間なので正確な時間はわからないが、約一分過ぎた。……とりあえず、ここで俺がすることは…。

「あー…もつと上手い言い方すれば良かった、悪い」

謝罪。これ以外に、何を言えば良いかわからなかった。

言いながら振り返ると、無表情に近いながらも頬に赤みがあり、拗ねてる？ような感じが見受けられる。

渋谷は俺の言葉を聞いて、一息を吐いた。

「私の方こそ…ごめん。何だか迷惑かけちゃって…。

………それで…その…」

謝られてしまった。謝られても…渋谷には非はないんだが…というか、俺が困るからやめてくれ。

「どうかしたか？」

そして何か言いづらそうなことでもあるのか、言葉に詰まってる。俺に対して？ 一体何を言われるのか…。

「…お母さんが言ってたけど、愛想がない、っていうのは自覚あるんだ。それで、誤解されたこともあるしね。芳乃もそう思う？」

自分の母親からそう評価されればそう思うのは仕方ないって思う。それに昔から自覚はあったんだろう。ただ、その現状を俺に肯定して欲しいのか否定して欲しいのかは知らないが、俺自身の意見としてなら決まっている。

「いや、思わない」

「………え？」

「思わない…というか、まだ知らない、と言った方が正しいかもしれない。そこまで判断が出来るほど、俺はまだ渋谷を知らない。他の人

は知らないけど、俺はそう判断するには早いと思ってる」

会ってまだ一ヶ月も過ぎてないのに、そんなマイナスの評価なんてよっぽどだろう。人それぞれかもしれないが。

…忘れていたが、ハナコは俺の足下にじっと座っている。

本当に懐かれたのかね…。

「笑ったり怒ったり、泣いたり楽しんだりすることが出来ないってわけじゃないんだ。表情の変化が読み取りにくいつてだけだろ。渋谷の自然に出る表情は、愛想がないって印象は全くない」

それこそ、初めて会った時の子供に手を振る際に見せた表情だとか。先日、ハナコを返した時のお礼の際に出た表情とか。あの自然な笑みを見て、愛想がない、とは俺は言えない。

「…そんなにはつきり言われたのは初めてだよ」

俺から視線を逸らし、自分の髪を手で弄る渋谷。まあ、あんな風に正面から言われた渋谷の立場なら俺でも困る。

「普通は言わないだろ。俺は…まあ、渋谷がアイドルになるかもしれない、なれる可能性に関わっている。そんな場面に出くわしたからな。自分の興味の有無だとか、やる前から向いてないからとか、頭ごなしに否定するんじゃないやなく、やってみてからでも良いんじゃないかって思った。

実際のプロデューサーから声が掛かるなんて、一生に一度しかないチャンスかもしれないからな」

渋谷にアイドルになって欲しかったわけじゃない。ただ、勿体無いな、そう思った。だからこそ、肯定的な意見しか言っていないしな。

「今日、その返事をしてきたよ」

本当に、1日で決めてきたのか。決断は早いらしい。

渋谷は俺に視線を合わせて、決断の言葉を発した。

『「アイドル、やってみる」って」

一度決めた以上、簡単に諦めたりしない、走り続ける。

そう、付け加えられたような気がした。

彼女は…決意している。決意をした目から、俺は視線を外せずにいる。綺麗だとか、それもあるが…明確な意思が伝わってくるような、

そんな感じがした。

「じゃあ、今日は凜のために料理を作らなきゃね」

電話が終わったのか、渋谷のお母さんが店の奥から姿を見せた。：何か凄く笑顔だな。自分の子供の決意を喜んでいいのか。

「それに、思った以上に凜と芳乃君の仲も良好みたいだしね。もう、仲の良い友達だと思っても良いんじゃないかしら」

：違う。いや、それも含まれているのかもしれないが、それだけじゃない。まさかとは思うが：

「長電話じゃなかったんですか？」

「ううん、電話自体は早く終わって戻ろうとしたら、面白そうな話してんじゃない？ 芳乃君が凜の思ってることを即否定したところだったけど」

ほとんど聴いてるじゃないですか。いや、聞かれて困る話だったかと言われれば、そんなことはないですけどね。

「でも、芳乃君も凜がアイドルになるかどうかって話は知ってたみたいで、それを芳乃君に教えるってことは：凜も満更じゃ」

「ハナコ！ 行くよ！」

渋谷が愛犬の名を呼んで、店の外へと走り出した。ハナコも凜の後をついて行く。：ある意味、正しい選択か。

追求される前に、逃げるのは良い選択だ。帰って来た後はさすがにわからないが。

「あらら、逃げられちゃった」

意地の悪い笑顔で娘を見送る母親。楽しそうである。

「：俺も渋谷の立場だったら、逃げるかもしれないけどね」

「まあ、あながち間違ってもないと思うけどね。どう、ウチの凜は？」

「…………ちなみに、どんな意味ですか？」

「どんな意味だと思う？」

「見当もつきませんね。ええ、全く」

「芳乃君にも逃げられちゃった、残念」

全然残念そうには見えない。同級生とかだったら腹が立つかもしれないが、お世話になってる人だからそんな気がしないのは正直助

かった。

「ま、何にせよ…凛のこと、よろしくね」

意地の悪い笑顔ではない。微笑を浮かべ、俺の目を真っ直ぐ見てそう言った。茶化すつもりはないが、ここは真面目に答えなければならぬ、そう思った。

「よろしく、なんて言わないでください。渋谷には既にアイドルと一緒に目指す仲間がいます。その人達と協力出来れば大丈夫でしょう」
渋谷のあの目を見れば、そう簡単に辞めるとは思えない。

何より、島村さんの他にもアイドルを目指す仲間がいると思う。

「…そう？じゃあ、凛から芳乃君を頼って来たら、その時こそはよろしくね」

「そこまで言われたらさすがに嫌だとは言えないですよ…。まあ、頼まれたら話くらいは聞きます。あくまで、頼まれたらですけど」

年頃の男子が積極的に同年齢の異性を積極的に助ける？

ないない、創作物語でもないしな。まあ…頼まれたり、助けを求められたら、それを見捨てるほど心が冷徹な人間でもないつもりだ。渋谷がアイドルになった要因に関わっている可能性が高いから尚更だ。中途半端にやめられても、こっちとしても良い気はしない。

「…満点とは言えないけど、良い返事だったから良しとしようかしらね。それに、芳乃君は凛のファン第一号だしね」

「…いやいや、待ってください。それはおかしいでしょう？」

さすがにそれはおかしい。…おかしいよね？　ファンになる要素どこにあるんですか。その前にクラスメートじゃ駄目なんですかね？

「どうして？　凛を応援してくれないの？」

「応援するかしないかで言えば、それはしますけど…」

「凛がアイドルになるのを一番に肯定したのは芳乃君でしょうし、応援もしてくれる。　だったら、芳乃君がファン第一号で異論はないでしょう？親公認よ？凛には私から説明しておくから」

あ、これ反論しても勝てないやつだ。あながち間違つてるとも言えない。厳密には島村さんが渋谷に対してアイドルになることを一番

に肯定してるような気がしなくもないが、同じアイドル同士でファンとはとても言いにくい。

あの背丈が大きいプロデューサーも、プロデューサーであるからファンとしてカウントができない…となると、第一候補となるのは…俺になるのか？

「そこは本人にお任せします。本人が承諾したなら、俺も逃げられませんから」

そう返答して、渋谷の母親に背を向ける。これ以上何を言っても難しいため、後は渋谷に否定して貰うしかない。

渋谷、後は頼んだ。俺はこの場は逃げる。

「じゃあ、また来てね芳乃君」

「ええ。また来ます」

今後、渋谷の母親には気をつけよう。気をつけたところで無駄かもしれないが…まあ、とりあえず帰ろう。

しかしまあ…アイドル、か。

渋谷がアイドルになって、助けを頼まれるとしたらどんなことだろう。学校の授業が終わってから行くだろうから…拘束されるのは…時間か？

となると、学校の宿題やら成績が問題になってくるのか…。渋谷の成績は知らないが…不真面目ということはないと思うし、そこは問題がないと思う。後は…：…正直わからない。まあ…頼まれることや助けがあるとは限らないのだし、考えても今はわからないのだから、とりあえず現状維持か。ま、今日買った花を飾ったりする時に思いつけばいいんだがな。

…渋谷、頑張れよ。直接は言えなかったが、心の中でそう思った。

第五話

今日は今日とて、始まる学校の日々。毎日、担当の教科の先生から出される課題を消化していくのは学生の本分だ。『遊びたい、部活がしたい』という欲はもちろんあると思うが、それとこれとは別問題だろう。もちろん理解力は人それぞれだし、どうしても解けない問題だってあるだろう。それはそれで良い、わからなければ先生に、先生に聞き辛いなら…答えがわかる友達、クラスメート…もしくは自分の親に聞いてもわかるかもしれない。基本的には知識の積み重ねだ。わからないことをそのままにしておけばその先で躓くことになる。いずれはわからないことだらけになり、課題も出来なくなり、やる気がなくなり授業にもついていけないくなり、テストの点数が低くなってしまう。それではマズイ。高校生ともなると、勉強は疎かに出来ないからだ。将来の進路が決まる…とは言い過ぎかもしれないが、将来に関わってくるのは間違いないのだ。面倒なことかもしれないが、必ず自分のためになる。『過去にこうして置けば良かった』等後悔しても遅い。『こうした方が良かった』と思つたことを『やらなくても大丈夫か、なんとかなるか』と思ひ直しやらなかった場合、高確率で痛い目を見る。そして痛い目を見た後に『ああ…やつぱりしとけば良かった』と思うのだ。意識改善をした方が良い、とまでは言わないが痛い目を見る前にやった方が恐らく損はしないと思う。話が逸れかけてる気がするが、言いたいことは、学校から出された課題は全くやらないのではなく、少しでも考えて解答を出してみよう、つてことだ。

「近藤、また課題が出てないんだが…」

「いやー、やろうとは思ってたんですけど…寝ました！

すいませんでした！」

「今まで出した中で半分も出てないんだからな、気をつけろよー」

朝、近藤が課題を見せてくれるように頼んで来たのだ。

結果から言うと、断つた。午後からの授業ではあるし、昼休みの時間があれば出来ない課題ではないと思つたからだ。だが、昼休みの時

間は睡眠欲に負けてしまったらしい。そして先生から注意されているわけだ。

しかし、半分も出してないのか…まあ、部活もしてるし忙しいのはわかるが…テストがある時期になると大変だと思うが。まだ高校の授業が始まってそこまで経ってないし挽回は可能だろう。まあ、自分に非があるのは認めてるのだし、手遅れになるまでにやって欲しいものだ。

「よし、今日は課題やってくるぜ！わからなかったらその時は教えてくれよな！」

「基本は教科書に沿ってやれば大丈夫だとは思うが…わからなかったら教えるよ」

「頼むな。じゃあな芳乃！」

放課後、近藤の宣言を受け取り、部活へ行く姿を見送る。

今日は346プロの番組が何かあったような気がしなくもないが…まあ、大丈夫だろう。

さて、俺は俺で考えていたことがある。先日、渋谷の母親会った件で、渋谷の手助けとして思いついたことがある。どうやら、女子は甘い物が好きだということだ。しかも、アイドルということは少なくとも人前で踊ったり歌ったりするのだから、結構ハードなレッスンをするはず。というわけで、糖分が摂取出来るお菓子を作ろうと思ったのだ。ただお菓子を作成するのも初めてだったら苦戦はしたかもしれないが…生憎初めてではないし、回数はそれなりにある。

最近で作っていなかったが、案外覚えていたものでなんとなく作れた。ここまでは良かった。ただ、問題は作り終えた後に気付いた。…どうやって渡せば良いんだ、これ。

学校内で渡すにも学校外で渡すにもどのタイミングで渡せば良いのか思いつかなかった。結局、そのまま放課後まで時間が流れてしまったわけだ。最後の手は考えてあるが、家に帰った後になり、家族の人と食べることになるだろう。別に家族の人と食べるのも良いが、島村さんのような同年代に近い女子もいるだろう。その人達と食べて貰いたい。そして、出来るなら感想が欲しいのだ。作った以上は美

味しかったか、口に合わなかったか気になるしな。

意を決して立ち上がった…のは良いのだが目的の人物がいない。既にクラスから出て行った後なのか。なら、追い掛けないとな。

偶然にも学校の外に出ればすぐにその姿を見つけることが出来た。彼女の後ろ姿の特徴である、長い髪。他の人にも似たような後ろ姿はあるが、何故か分かりやすい。俺が言うのもなんだが、渋谷はスタイルが良い。学生服で整っている長い髪、スタイル。ここまで揃っていれば後ろからでも割とわかりやすい。

「渋谷」

俺が呼び掛けると後ろを振り返る渋谷。相変わらずの表情…と思ったが、俺の顔を認識した途端、不思議そうな顔をする。俺から渋谷に話し掛けることなんてそうはないからな。相変わらず、クラスの中では挨拶する程度だ。

「これから事務所に行くんだろ？レッスンとかするだろうから、その際に甘い物が欲しくなると思うってお菓子を作ってきた」

と言いつつ俺が取り出したのは菓子の入った袋。白い袋に赤のりボンで取り出し口を縛ってあるだけの簡単な物だ。

「…お菓子、作れるんだ」

「まあ、前に作る機会があつてな。最近は作つてなかったんだが…。味見はしてるから大丈夫だ…と思う」

言い切れないのが俺の意思の弱いところだ。他人が美味しいと思っても、自分が食べてみたらそこまで美味しさを感じてなかったって言うのはありえることだしな。渋谷は差し出した袋を受け取り、袋をじつと見ている。

「貰つとくよ。ありがとう」

「ついでに言うと、一人分には多すぎるから、島村さんや他の同年代の人にも食べて欲しい。感想が出来れば聞きたいからな」

「レッスンの合間に卯月達と食べさせて貰うよ。ところで…中身はなに？」

「そーいや言つてなかったな。クッキーだ、バタークッキー。次作るなら、何か要望があつたらそれに合わせて作るよ」

ちなみに、何故バタークッキーを作ったかの理由はない。

一番先に思いついたのがバタークッキーだったってだけだ。

「美味しくなかったら、作る機会なくなるけどね」

「…お手柔らかにお願いします」

微妙な笑顔で言うな。反応に困る。まあ、本気で言っているわけではないだろうから嫌がってはならないのだろう。それだけで今回は十分だ。さて、これから事務所に向かうのだから長話しては迷惑だろう。

「事務所に行くのに呼び止めて悪かったな。頑張れよ」

「うん、ありがとう。えつと…」

「…どうした？」

渋谷に背中を向けたままでは良かったが、何か言い掛けている感じがする。…俺の方から言うことはないだろうが…。

そういえば、何か渋谷に聞きたい事があったような気はするが…思い出せない。

「ううん、何でもない。…じゃあね」

「ああ」

渋谷の方も特になかったのか、背を向けて行ってしまった。まあ、大したことじゃなかったのだろう。思いついたのなら、言い淀むこともないだろうしな。

何にせよ、お菓子の感想を聞ける時が楽しみだ。次に何を作るのか楽しみにしながら、俺も帰路に着くでしょう。

「よし、課題終了ー」

本日分の課題を片付け、背伸びをすると、パキッと良い音が鳴った。時刻は午後6時30分。夜飯を作っても良いが、今日はそこまで腹の減りが早くないようだ。そういや、最近音楽プレイヤーの楽曲を整理していなかった気がする。聞きたい曲があるかも知れないし、CDを借りてくるついでに晩飯も買ってくるでしょう。

CDのレンタルショップを出る。結構CD借りたな…10枚いく

かいかないかぐらいだ。その中には765プロ、346プロのCDも混ざっている。ほとんどは課題を片付ける時に流すBGMなのだが、出掛ける際にも聞くことがあるため割と歌自体は覚えることが多い。歌えるかどうかは別問題ではあるが…。さて、後は晩飯を買って帰るだけだがどうするか。どこで買って帰るかを決めなかったため、どうするかを考える。コンビニ弁当でも良いが、なんとなく味気ないような感じもするし…。と、思考しながら曲がり角を曲がった所で、見知った顔を見かける。相手も同じタイミングで気付いたところで手を振ってきた。

「こんばんは芳乃さん！」

笑顔で声を掛けて来てくれた。彼女の笑顔は眩しい。俺に向けているのが勿体無いな…本当。

「こんばんは島村さん。仕事帰りですか？」

「そうなんです。ダンスレッスンしてるんですけど、難しくて…。でも、楽しいです！」

「楽しいなら何よりです。でも、事務所に入って間もないのにダンスレッスンとは…やっぱりハードですね」

「えっと…それには理由があつて…私達、ライブのバックダンサーをやることになったんです！」

「バックダンサー…それは凄いですね」

バックダンサー、ということとはメインで踊るアイドルから、もしくはプロデューサーから島村さん達が抜擢されたのか…？　そうでもなければ入って間もない状態でそんな大胆なことはしないよな。

…？　私達つてことは…

「私達つてことは、島村さんの他にもバックダンサーをやる人が？」

「はい！　私と凜ちゃんともう一人、未央ちゃんと…なんですけど、凜ちゃんから聞いてないですか…？」

島村さんが三人の名前を言った所で、不思議そうに質問を返された。まあ、俺が既に渋谷から聞いていてもおかしくないと思っただろうけど、残念ながら聞いていない。

「聞いてないですね。そんな毎日話するような仲でもないですし、言わ

なかったとしても不思議ではないです」

まあ、言って貰ったところで気の利いた返事が出来たとは思えないが。それに、渋谷が俺に言ってくるとは…正直、考えにくい。仲の良い同性友達なら話すかもしれないが、異性で今年知り合った俺に話すとは思えない。教えてくれたとしても何かできるわけではないが、応援くらいはしないとな。

「応援くらいしか出来ませんが、頑張ってください」

「ありがとうございます！　島村卯月頑張ります!!」

レッスン帰りなのに笑顔の絶えない彼女。本当に楽しくやっているのだろう。実際に島村さん達が出る日付がいつかはわからないが、そう遠くはないだろう。インターネットで調べれば日程くらいは大方向かるかな。

「島村さん、まだ時間ありますか？　一つ、聞きたい事があって」

「大丈夫です！　　何でしょうか？」

「今日、渋谷が持ってきたお菓子を食べたと思うんですけど、どうでした？」

明日とかにでも渋谷に聞く予定だったが…ここで島村さんに会ったのも良かったかもしれない。直に感想が聞ける事に悪いことはない。何を質問されるか、若干緊張気味だった島村さんの表情は、俺の言葉を認識した瞬間に、またも笑顔になる。

「凄く美味しかったです！　最初は凜ちゃんが買ってきたのかと思ったんですけど、違うって言ってて、貰い物だって言ってたんですよ！　」
「良かったです、久しぶりに作ったんで不安だったんですけど、安心しました」

「みんなから誰からの貰い物かって凜ちゃんに聞いたんですけど、教えてくれなくて……………え？」

……………島村さんの笑顔が固まる。

「えっと…芳乃さんが凜ちゃんにあげたんですか？」

「はい、今日の放課後に」

「…ちなみに、何のお菓子でしょう？」

「バタークッキーです」

「どこかのお店で買ったんですか…?」

「大変恐縮ながら、手作りです。久しぶりに作りましたけども」

「……ええくくくく!?!」

街中で割と大きめの声を張り上げる島村さん。…とりあえず、周囲に人がいないのが助かった。不審にこつちを見てくる人はいなかった。

「芳乃君の手作りなんて…何か負けた気分です…」

「何にでしょう?」

「女の子としてです…。私、こんなに上手にお菓子が作れるか自信がないです…」

「練習すれば出来ますよ、最初からなんて上手くないですから」

レッスンも同じだ、練習して出来るようになるのと一緒だろう。…島村さんは喜んだり落ち込んだり、コロコロ表情が変わる。裏表がないのだから、きつと誰でも仲良くなれそうな気がする。そうだ!、と何かを思いついた島村さんが改めてこつちを見る。

「作りたい時は芳乃さんに教えて貰ってもいいですか?」

「俺に?」

「はい!ダメ…でしょうか?」

断る事はできるが、正直断り辛い。断ったら断ったで落ち込みそうだし、こつちもなんとなく接し辛くなりそうだ。

意識はしてやってないとは思いますが、断られるかもしれない思いながら問い掛けているこの状態を島村さんがやっているというのも、断り辛い。彼女もアイドルを目指す上で十分な容姿を持っていると思う…俺が言えたことじゃないけど。

「良いですよ。お菓子の作り方を人に教えたことはないですけど、それでもいいのなら」

断る理由もとくにないのも確かだ。普段から家は綺麗にしてるつもりだが…特に綺麗にしとかないな。…って、俺の部屋に来るとは限らないのか。何を考えてるんだ俺は。

「はい!時間がある時に連絡します!」

そこまでして教えて貰いたいのか。連絡される前に、二人で作ると

なると何が良いのか考えないといけないな。それとも、島村さんは作りたいお菓子でもあるのだろうか。

ま、これはその時に聞く形で良いだろう。

「これ、私のアドレスと電話番号です」

島村さんはスマホを操作し、アドレスと電話番号を表示させた画面で俺に手渡してきた。画面を見ながら登録し、メールを1通送信し、電話をワン切りする。間違えることなくメールも来だし、電話も鳴ったことを確認して、スマホを返すと、島村さんは俺の分を登録していく。

「えへへ、ありがとうございます。思いついた時に連絡しちやいますね」

凄く嬉しそうだ。この分だと、電話がかかってきた際は割と物事を終わらせてからの方が良いかもしれない。まあ、いつ連絡が来るかもわからないし、俺から電話することはほぼないとは思うのだが。アドレスや電話番号を登録してる友達にも、何か用がなければ連絡しないな。

「了解です。すいません、長時間引き止めてしまつて」

「いいえ、楽しかったですから。最後に、私から一つ、お願いしても良いですか?」

「…何でしょう?」

「私も凛ちゃんみたいに接して欲しいです!」

………ん? 島村さんと渋谷で接し方が違った覚えはないんだが…何か違っただろうか。

「えつと、言葉遣いです…私の時はちよつと余所余所しさを感じるの
で」

島村さんの時は敬語っぽく話してるしな。年上っぽいのだが、どちらかと言うと同年齢に見えるしな…失礼な事だが。まあ、本人がその方が良いって言うなら、普通に喋った方が良いか。

「改めてよろしくな、島村さん。…これで良いか?」

「はい! 芳乃さん、これからもよろしくお願いしますね!」

彼女が真正面から向き合うため、俺も彼女には嘘は吐消そうにな

い。現状で、嘘を吐いてるわけではないけど…な。

結局、コンビニ弁当を買って帰り、弁当を食べた後にいつもの様にBGMを聞きながら課題を消化していると、LINEの通知音が聞こえた。BGMの音量より携帯の着信音や通知音を大きめにしておくことでお知らせに気づくようにしている。区切りが良いところまでチェックしないのだが、タイミング良くちょうどひと段落したため、携帯を手に取り確認する。

「ん？」

通知を確認すると、思った人とは違う人からメールがあった。どうか、名前が表示されていないから登録してないアドレスだ。…迷惑メールか？まあ、中身を見てからでも遅くはないか。

「…あ、そっぴやそっぴや」

結果から言うと、中学が一緒だった時の友人からのメールだった。高校に入学する前に携帯電話を紛失、そこまで登録数は多くもないアドレス帳が消えてしまったため、こちらから連絡することが出来なくなったのだ。アドレスや電話番号を覚えてる友人にはアドレスや電話番号を買い直した後に送ったのだが、全員は覚えきれていない。新しいアドレスを伝えた友人から教えて貰ったのだろう。簡単な返信文を送り、アドレス帳に再登録を行い携帯を元の位置に置く。大方、前に登録してた分は戻ったと思うが、まだ完全には修復出来ていない。何より、俺が過去にお菓子を作った相手のアドレスがまだ戻っていない。彼女とは、高校も別の高校に進学したため、連絡の取り用がない上にどこの学校かも知らないのだ。メールのやり取り自体は、彼女から送られてくるのがほとんどであり、内容も日常の出来事を伝える事が多かったため、向こうからしたら無視されていると思われるも反論出来ない。…もし、偶然にも会うことがあれば事情を説明して謝ろう。謝る機会があればの話だが。

第六話

夕方。

先生からの依頼事で学校から出るのが遅くなってしまった。断ることも出来たが、別に断る必要もなかったから引き受ける事にした。
：ここまで時間がかかるとは思わなかったけど。

今日、渋谷本人から聞いた話では、お菓子は中々に好評だったらしい。お菓子好きな仲間もいるらしいが、その人も納得する美味しさだったとか。毎日作っているわけでもないが、不評はないのでこちらとしては安心して嬉しものだ。

現状だと簡単なのしか作れないから、もっとレパートリーを増やしても良いかもしれないが、持つてる本だとそんなに種類は載ってなかったはずだから、買いに行かないといけないな。………本屋に行くか。

今思えば、趣味と呼べる事が何もないため、お菓子作りというのは趣味にして良いかもしれない。ただ、自分で食べないから食べてくれる人が必要ではあるが。：しかし、こういうのは職業にしている人には失礼かもしれないが、男の俺がお菓子作りが趣味とはどうなんだろうか。朝のランニングは趣味というよりは日課だし、ゲームというのは問題がある気がするし、他に何かあるかと言われると何も無い気がする。：運動部に所属というのも考えたが、考えるだけで終わってしまった。なんだかんだで自分の時間が使えるというのは大事なことだと思っしな。

：さて、目的の本を買い外に出たところで電話に着信があった。
着信の相手は：渋谷の母親。用件としては、時間があつたらお願いしたいことがあるとのことだ。特にこの後の予定を決めていたわけではなかったため、了承の返事をして現地向かった。

「ハナコを散歩に連れて行って欲しいの：：お願い出来る？」

と言うのが用件。店番で離れられないからとのことだ。いつも散歩をする渋谷は、例のバックダンサーの件で自主練してららしい。

で、代役を頼まれたのが俺ってわけだ。今日くらい散歩に行かなくても良いんじゃないかとは正直思ったが：口に出さなかった。了承したのは俺だし、反論することもないだろうしな。

散歩ルートは特に決まっていなかったため、適当に歩いて帰って来れば良いらしい。とは言うものの、犬を散歩するなんて初めてなわけでどこを歩こうか迷ったのだが：学校へ行く道を歩き、帰りに公園に寄って帰ることにした。

特に何か事が起きるわけでもなく、（ハナコは大人しく散歩に付き合ってくれた）公園の入り口に差し掛かる。珍しく人の姿がない：と思ったが、端の方に激しく動いている姿が目に入った。動いているのではなく、ダンスの練習だと気づくのとそれが知ってる人物だと気づいたのは同時だった。ここで練習してたのか：。まあ、距離的にも近いし無難だとは思う。こちらから見たら後ろ姿だから、渋谷は気づかない：かもしれないが、愛犬は彼女の方に行きたいらしい。さつきから腕が引つ張られている。俺としては練習の邪魔をしたくないが：まあ、ここでハナコの機嫌を損ねるのも良くないだろう。手綱から手を離すと、飼い主の元へ全力で走っていく。俺もゆっくりとハナコの後を追って歩きだした。

「ふーん、お母さんから頼まれたんだ」

そう言うって渋谷がペットボトルの蓋を取り、中身を口にした。

現状、俺がどうして渋谷の愛犬を連れて行くのかの説明をしたところだ。少し怪しまれたが：どうやら信じてくれたようだ。まあ、その気持ちかわからなくもないんだが：こつちとしては説明のしようがないから信じて貰うしかなかったんだ。最悪、渋谷の母親にも連絡しなければならなかったかも：と思ったが、そこまでの事態にならなくて良かった。

「でも他人のお母さんから頼まれるなんて、普通はないよね：」

「俺も頼まれるとは思ってなかったよ：むしろ、依頼されたことなんて初めてだ」

まあ：他人の母親から飼い犬の散歩を頼まれることなんて、普通は

ないと思うがな。当の飼い犬は、飼い主の足元で大人しく座り込んでいる。幸せそうだな。そういえば、と渋谷が言葉を続けた

「お母さんと割と仲良いよね…何で？」

「この前みたいに花を買いに行ってるからだな。最低でも1ヶ月に一回は行ってるよ」

「変わった趣味してるよね…」

「まあ、趣味というか…何というか」

「何かはつきりしないね…」

…まあ、隠しても良い事じゃないし、言っとくか。誤魔化すことも出来るだろうが、それはそれで後で面倒になったら嫌だしな。

「…亡くなった母親にお供えしてんだ。花が好きだったからな」

末期の癌だった。それに気づかないくらい母親は病気という言葉が似合わないくらい健康な母親だった。だからなのか、健康診断など受けたようなことは何も聞いたことがなかった。

「…ごめん」

「いや、気にしないでくれ。もう心の整理はついてるしな」

…いなくなつた人を頼つても、願つても、戻つて来るわけじゃない。それがわかつていたからこそ、一番に母さんの使用していた物、部屋の整理をした。見るのが辛い、ということも当時はあるが、そうしなければ受け入れられなかったかもしれないから。手伝つた時もあったが、母親が当時やってた家事も本格的にやり始めたのはそこからだったか。

「…渋谷、一つ良いか？」

「…うん」

俯き加減で頷く渋谷。まあ、こんな話をされたらどう接したら正解かわからないだろう。実際、正解なんてあるかわからないが、ここはこちらから希望を出すことにしよう。

「難しいかもしれないが…俺の母親のことは気にせず、今まで通り接してくれると助かる。あまり、気を使われたくないんだ」

個人それぞれだとは思いますが…気を使われると接し辛くなる。あくまでも俺の個人的な意見だがな。同級生なら尚更だ、気兼ねなく接し

たい。渋谷は言葉ではなく、先ほどよりもしっかりと頷いたことで返事を返してくれた。これなら大丈夫だろう。

「…と、邪魔したな。そろそろハナコを連れて帰らないと」

渋谷達が行うバックダンサーの日まであまり時間がないし、話し込んでも悪いだろう。…しまったな。それならライブが終わった後にも話すべきだったか。退屈そうに座っていたハナコのリードを掴むと、立ち上がった。

「私はもう少し練習してから帰るよ。ハナコをよろしくね」

「了解。頑張っても良いが、あんまり無理するなよ」

自分の愛犬の頭を撫でて、俺の目を見て、視線を外した後に準備体操を始める渋谷。俺は返事を返してハナコを家に連れて帰ることにした。

微笑、というのが正しいのか。ハナコを撫でたまま俺に向けられた表情。それがハナコだけに向けられたのか、俺にも向けられたのか定かではないが、今日の最後に見れた表情としては…まあ悪くないかな。

渋谷の性格をはつきりと知ってるわけではないが…大丈夫だと思いたい。これが島村さんならまた話は別になるかもしれないが。

「助かったわ、ありがとね」

「別に良いですよ。今日は予定もなかったですし」

無事にハナコを渋谷家へと連れ帰り、渋谷の母親に報告。終始ハナコは止まることなく歩を進めていた。自分の家に帰るなり家の中に入っただけだったが。

「公園の方で練習してたとは思うけど、凜には会った？」

…誤魔化しても良いが、やめておこう。どうも見破られそうな気がする。というか誤魔化す意味がない。時間的にそろそろ店仕舞いの準備をしているのか、花の植えられた植木鉢を店の中に入れていく。「会いましたよ。あまり練習の邪魔しては悪いと思ったので少し話しただけです」

正確に何分かはわからないが、支障のないようした…とは思いた

い。

「もしかして疑われなかった？ 何でハナコを連れてるのかって」

「予想通りです。すっごい疑われました」

「やっぱりそうよね、一旦手を止めて渋谷の母親はこちらを見てそう答えた。表情が楽しそうだ。きつと自分の娘が俺に向けている表情を想像しているのだろう。：俺としては誤解を解けるか不安だったんだが。」

「まあ、芳乃君の表情を見る限りその疑いも大丈夫だったみたいね。またお願いする時があるかもしれないから、その時はよろしくね」

「予定がなければ良いですよ。それじゃあ、作業のお邪魔してはいけないからこれで失礼します」

「あー、待って芳乃君。お礼に良いこと教えてあげるから」

自分の家に帰ろうとした矢作、呼び止められる。そして手招きをされている。嫌な予感しかしない：嫌な予感しかしないが、俺は近くまで寄った。俺の左耳に口を寄せて喋り出す。この距離なら俺にしか聞こえないだろう。

「凜の好きな物はチョコレートよ。今度、お菓子作るときの参考にしたらどう？」

「：何で俺がお菓子を作ってること知ってるんですか」

「そりゃあ凜の母親だもの。娘のことは把握してるわよ」

「：……今後の参考にしときます。とだけ言っときます」

それでは、と言って頭を下げて帰り道に向かって歩き出す。しかし、渋谷の好きな物がチョコレートね。あの人のことだから嘘は吐いてないだろうが、どうするか。覚えておいて損はないだろうし、本当に参考にさせて貰うとしよう。参考にはなるかもしれないが、チョコレートと言っても甘いのが好きなのか苦いのが好きなのかわからない。もしかしたら両方好きなのかもしれないが：まあ、今日作ると思っただお菓子には関係ない。ちなみに、今日作ろうと思っただ物はパウンドケーキだ。チョコレートとは関係ないのは仕方ないが、今日も納得してくれるように作ることに変わりないからな。：その前に自分の夕飯を考えよう。冷蔵庫の中に食材はあつたはずだし、中身を見て

考えるとするか。

翌日。予定通り作ったパウンドケーキを持参し、学校に登校した。

パウンドケーキ、と言つても切り分けて作つてるので、入れ物自体はそこまで大きいのを用意せずに済むから持参するのにも邪魔にはならない。…まだ季節的には大丈夫かもだが、一応保冷剤を忍ばせてはある。念には念を入れてだ。ちなみに、いつも渋谷に渡す時は放課後になつてから渡している。クラスの中で渡したり外で渡したりなど場所はバラバラではあるが、どちらかと言うと外の方が多い。クラスの中で渡した際に、「どういう関係なのか」「付き合っているのか」どうかと男子女子入り乱れて言い寄られたことはあつたが、事情を説明すると盛大に残念がられた。渡す人を同じ事務所仲間、というわけではなく友人と渋谷の母親に…ということにしたが。

「まあ、芳乃ならありえそうだな」というのは当時の近藤の証言。

一応、渋谷にはその時のことは謝つたが「私も気にしてないから」とのことだった。

「今日は持つて来てる?」

放課後になり、いざ渋谷に渡すために立ち上がったのだが…珍しく渋谷の方から話しかけて来た。いつもは俺から声を掛けるのだが今日は逆だ。もしかしたら声を掛けてきたのは初めてかもしれない。

「持つて来てる。良くわかつたな」

「……………そろそろじゃないかなって思っただけ」

…本当にそう思っているのか、それとも昨日のことで気を使つてくれているのか判断がつかないが…問い詰めるべきじゃないだろうな。

問い詰めたところで、得があるわけでもなさそうだ。お菓子の入った袋を差し出すと、両手で下皿の形を作つたのでその上に乗せた。

「そういえば、リクエストみたいのってないか?」

「リクエスト?」

「作って欲しいお菓子とか。作れるかはわからないけど、そういうのがあるのかなって」

自分で決めたのでもいいが、要望のあったお菓子の方が考える手間も省けるし、感想もより具体的な事を聞けそうだと思ったからだ。デメリットは好みの味にしないと味に否定の声が出てきそうところか。

「今日、みんなに聞いてみるよ。多分あると思う」

受け取ったお菓子袋を通学鞆に入れ、自分の髪が肩にかかった部分を後ろになるように払いながら答える。

「じゃあ、渋谷のリクエストはあるか？」

「私の？」

「今思いついたらでいいから。何かあると今度渡す時はそれを作ってくるよ」

予想外の質問だったらしく彼女の目の開きが大きくなった。それから目線を逸らし、髪を触っている。彼女のアイドル仲間兼友人でもある島村さんや他のアイドル仲間達の要望があつた場合、もちろん要望に合わせて作るが：目の前にそのアイドルであるクラスメイトがここにいるのだ。一番先に要望を聞いても悪くはないだろう。

「チョコレートを含んでるお菓子：とか？」

「含んでるお菓子：。チョコレートが好きなのか？」

「…まあ、ね」

どうやら、渋谷の母親が言ったことは本当らしい。再度言うが、本当に疑ってはいないぞ。そして微妙に恥ずかしいのか視線は外したままである。なんか俺まで微妙に恥ずかしいな。

「……………了解。ちよつと考えてみるよ」

「期待してる。感想は遠慮なく言うから覚悟してね？」

「前にも言った気はするが、お手柔らかなにな」

「今日作ってくれた分から楽しみにしてるよ」

じゃあ、と言って彼女はレッスンに向かった。

お菓子を初めて渡した際に、前にも似たようなやり取りをした気がするが、その時よりも表情は笑顔に見える。：なんとと言うか、やはり

渋谷はアイドルに向いてると思う。あの公園で言ったことに嘘偽りはない。アイドル渋谷凜、彼女が人気になったら、その人気と同時に学校でも色々とおあるかもしれないな。…実際、やはり受け入れられなくてやめてしまうこともあるかもしれないしどうなるかはわからないがな。

………なんにせよ、そのアイドルに要望されたのだ。下手な失敗はしたくないし、腕を磨くでしょう。これも良い経験…になるよな、多分。

第7話

バックダンサーの件は大成功だったらしい。ライブが終わったその夜、島村さんからメールが届き、メールの文章からその旨が伝わってきた。これでアイドルとしての一步を踏み出した、と言ったところだろうか。いくらバックダンサーとはいえ、ステージに立てたことは良かったと思う。それだけではなく数日後、トントン拍子にバックダンサーで踊った三人組でCDデビューまで決まったらしく、収録も行なっている。と島村さんから連絡があつた。三人組というこは：島村さんと渋谷と：みお：さん（会ったこともないからさん付けにしとこ）だっけか。普通はこんなになんか早く決まるものなのかどうかはわからないが、何かきつかけがあつたのかもしれない。：クラスメイトがアイドルで、しかもCDデビューか。何だかそう思うだけで特別な環境にいる気はする、良い意味でだ。そんな良い流れの中で日にちが過ぎていき、今日は生憎の曇り空。しかも雨雲っぽいのだ。今日は降らないかもしれないが近い内に振るのは間違いないだろう。しばらく雨なんて降ってなかったから、とある場所や人にとっては恵みの雨になるか。その反対で、必要な人もいるだろうが俺みたいな学生にとっては通学・帰宅の際に面倒な手間を取らせる。雨も必要なことだとは理解はしているが、面倒だと思ふことくらいは許して欲しいものだ。：さて、授業中に別のことを考えるのは良くないし、そろそろ集中しよう。先生が俺を見てるしな。

「そう言えば、この前346プロのイベントに行ったんだけどさ。渋谷さんの様子が何か変だったんだよ」

放課後になり、近藤が話しかけてくる。先日、イベントがあつた：と言うのはCDデビューのイベントだろうか。確か、渋谷や島村さんも参加していたイベントだったはずだが。

「とどうと？」

「渋谷さんがいる方のユニット方なだけでさ、こう：楽しんでないって言うか：。単純に疲労が溜まって体調が悪いのかとも思ったんだけど、今日は普通に学校に来てたしさ」

もう既に渋谷は教室にはいないが、確かに今日は渋谷は学校に来ていた。今日は例のお菓子を作ってないため会話はしていない。何回か視線に映ったりはしたが、流石に何かを感じることはできなかった。

「渋谷がいる方のユニットってことは、そのイベント何組か参加してたのか？」

「もう1組だけな。もう1組の方はデュエットだったんだけど可愛いって言うより綺麗だったし、歌い終わった挨拶も全然普通だったよ」

「渋谷達の方は？歌い終わった挨拶に違和感があったってことか？」

「いや、歌ってる最中もだ。こう動きがぎこちないっていうか、元気が出そうな曲なのに表情は何か作ってるような感じだったし、終わった後の挨拶も俯いてる感じだったんだよ。………そういうえば、渋谷さんともう1人がセンターの子をやたら気にしてる様だったな」

「…センターの人って、髪は長かったか？」

「いや、ショートだよ。…って、何でそんなこと聞くんだ？ショートヘアの方が好みなのか？」

「そういうわけじゃないんだがな、ちよつと確認したかったんだ」

確かに聞き方が悪かったが、誰がセンターだったのか把握したかっただけだ。近藤の話からすると、センターは島村さんでも渋谷でもなくみお…さんという人だったのだろう。

「緊張…じゃないのか？ それなら動きが固かったのもわかるし、センターの人が特に緊張してたから氣遣ってたとかで話を通ると思うが」

…聞いた話だけだと全くわからない。体調不良には見えず、表情や動きが固かったとなれば…緊張という理由しか思いつかなかった。

「芳乃がそういうならそうなのかもな。まあ、こういうのって一番は経験するしかないからな…前にやった時は、会場は広がったけどバックダンサーだったし、今回は自分達で歌も歌ったんだから緊張の度合いが違ったんだよな、きつと」

予想としてはここまでだろう。これ以上は本人のいないところで

議論しても仕方ない。

「それはそれとして…近藤」

「なんだ？何か聞きたいことが他にもあったか？」

「…………それを何故に俺に聞いたんだ？渋谷の友人なら他にもこのクラスにいるだろ」

「だって、一番仲が良いの芳乃だろ」

「それはない。同性の友人の方が仲が良いし、異常があった場合は気付きやすいはずだ」

幼馴染とかならまだしも、高校に入学して初めて会ったんだ。しかも学校以外で顔を見ることは…………あることはあるがそれも偶然だ。

「なら今度、クラスが集まってる時に聞いてみても良いぞ？」 『この

クラスで渋谷と一番仲が良いのは誰だと思う？』 ってな」

「冗談でもやめてくれ」

仕方ないな、とニヤつきながら言うのと近藤は帰っていった。今日は雨が降りそうなこともあつてか、元々部活は休みの予定だったらしい。

…もし、一番仲が良いのが俺になったと証明されても、渋谷の機嫌が悪くなりそうだ。俺が一番仲が良いなんて証明されでもしたら、お互い話し掛け辛くなりそうだしな。はたまたその様子を察した渋谷の母親に何を言われるか、と想像しただけで頭が痛くなる。…………まあ、もし俺が現時点で渋谷と一番ではないにしろ仲が良いって言うなら、俺にとっては嬉しいがな。容姿の整ったアイドルと仲が良いって、嬉しくないわけがない。と、ズボンのポケットが震えたことに気付く。携帯の振動だ。数秒間のものだし、メールか何かだとは思わが。

「…………最近、忙しかったからな」

教室に誰もいなくて良かった。つい独り言を呟いてしまったが、島村さんが風邪を引いた、と本人からメールが来たのだ。先日のイベントで2人から気遣われていたセンターのみおさん。今日から風邪を引いている島村さん。そして、渋谷。

まるで天気によって流れが変化しているような気がするが：気のせいだよな。島村さんに『お大事に』とメールを打ち、帰宅のために席を立った。

現状で雨が降っていないため家から持って来た傘を学校に置きっ放しにしたが、今日は降らなそうだから安心した。今日は買い物もなし、真っ直ぐ家に帰ろう。と、曲がり角を曲がったところで何かとぶつかりそうになる。

「すみません」

「いえ、こちらこそ申し訳ございません」

ぶつからずに体を避けて軽く頭を下げて謝罪をしたところで、顔を上げるとスーツ姿が見えた。声も随分と野太いな…。最後まで顔を上げると、見覚えのある方だった。

「渋谷のプロデューサー…」

一度見れば中々忘れることが出来ない容姿だったため、流石に覚えていた。まさかこんなところで遭遇するとは思わなかったが。

「渋谷さんのクラスメイトの方：で宜しかったでしょうか？」

「そうです。こうして会うのはあの時の公園以来2度目です」

どうやら相手もこちらを覚えていたらしい。素性の確認のためにも疑問形で聞いて来たが、アイドルのプロデューサーだ。日々、色々な人に会うだろうし覚えていただけでも凄いと思う。今回に関しては、仕事だろうし出先に向かう途中だろうか。時間を取らせても悪い：とは思うが、聞いて良いものだろうか。先日、ステージ上に立った3人に問題自体が起こってないかもしれない。もしくは、センターのみおさんだけに問題が起こったとして、何か状況を聞こうものなら：それこそただのお節介だ。島村さんは風邪で休んでいるため恐らく自宅で療養中。彼女はプロデューサーがお見舞いに行つて状況確認などするかもしれないから問題はないだろう。

「あのお仕事中心だとは思いますが：一つだけ聞いても良いですか」

「何でしょうか？」

「最近の事務所での渋谷は、元気でやっていますか」

何も起こってなければ良い。そう思いながらも、聞いてしまった。担当のプロデューサーなら、彼女は自分のことを愛想がないと言っていたが、異常があれば気づいている可能性は高いと思っっている。

「……………少々、問題はありますが心配はありません」

答えるまでに間があり、目線を外し、後ろ首をさすりながら答えたプロデューサー。

「…そうですか」

「…では、私は急ぎますので」

プロデューサーはこちらに一礼して俺が来た道を歩いて行った。あの人がどこに行くのかは知らないが、知ったところで仕方がないだろう。質問にたいして問題がある、と答えたということは現状まだ解決してない。問題の発生は近藤の言っていた先日のライブである可能性が高い。そして渋谷、もしくは彼女を含めた3人に直接的に起こっている。少々、とは言ったがそれはプロデューサーにとっての見解であり、本人にとっては小さいかどうかはわからない。正直なところ本人に直接確認すれば良いのだが…明日明後日は学校は休みだ。直接家に行つてまで確認するというのも、躊躇いがある。島村さんに聞いたらわかるかもしれないが、体調不良の人にわざわざ聞くのもどうだろうか。

…なるようにしかならないか。

実際、どこまで接すれば良いのか、どこまで関わるべきなのか…俺の中でまだ決心がついていないからこんなにも優柔不断なんだと思う。

アイドルというのは、遠い存在のように実際感じることも事実だ。そんなアイドルの問題を…関わったところでどうにか出来るのか…？

相変わらずの曇り空を見上げ、明日は雨が降りそうなことを確信しながらそんなことを考えた。

翌日。昨日の確信は現実となり、雨が降っている。そんな中、学校

に忘れた傘を取りに行った。なので今手元には2本の傘がある。実際は学校の傘を取りに行ったのはなんとなくだ。予備の傘は家にあつたため取りに行かなくても良かったが、家にいても落ち着かないから外に出て、どうせならと思いい取りに行つただけのこと。そして昨日と全く同じ道を帰つてる…と走っている誰かとすれ違つた。こんな雨の日に急いでいるなんて大変だな…と思いつつも後ろを見ると、昨日振りの背中が見えた。傘を持っていない状態だ。

「渋谷のプロデューサー！」

雨が降っている中で走っているため、聞こえなかつたら意味がないと思ひ、声を出した。相手は気付いたらしく、こちらを振り返ると昨日の別れ際と同じように一礼をした。走っていたということは何処かに急いでいただろうに、礼を忘れないのは仕事が出来人なのだろう。

「担当のアイドルが体調を崩してるのに、自分まで体調崩したら意味がないですよ」

急ぎ足で近付き、開いていない方の傘を渡す。髪もスーツも濡れてしまっているが、濡れ続けるよりかは良いだろう。

「ありがとうございます。必ずお返ししますので」

受け取つた傘を開き言葉を告げて走つて行つた。…連絡先どころか名前も知らないが、どうやって返すつもりだろう。まあ、そのまま自分の物にしてくれても別にいいんだがな。

…彼は彼で恐らくやるべきことのために走っている。それが自分のためなのかアイドルのためなのか、はたまた別のことなのかは定かではないにしろ、やるべきことがあるのだ。

…なら、俺のやるべきことはなんだろう。いつまでも考えるだけでは意味がない。意味がないのはわかつているが…明確な答えは出せない。

いつの間にか雨は止んでいた。いつの間に止んだのかはわからないが、傘が一本になり、そんなに時間は経っていないと思う。よほど考えに耽つていたのか、現在位置を把握するのに周りを見渡すと…例

の公園が目の前にあつた。そして：ベンチの前に座っている一匹の犬と：容姿からでもわかる同じクラスメイトのアイドルが見える。もう既に問題は解決してるかもしれないがそれならそれで良いだろう。ただ、ここで声をかけなければ現状把握も出来ない。歩いてベンチに近付くと、彼女の様子で問題がどうなっているかに気付く。具体的解決は出来ないかもしれないが、ここで放っておくほど知らない仲でもない。

「ベンチ、濡れてないか？」

渋谷が何に困って何に悩んでるかもわからないし、話してくれるかもわからないが：手は差し伸べてみよう。そう決心し、声をかけた。

「どうしてここに？」

それが彼女の第一声。嫌悪感は特に感じない。若干声が弱々しい：様な気がする。今は関わって欲しくない：という感じではないようだ。

「昨日、学校に忘れた傘を取りに行つてた。今日は特に予定もなかったしな。それで帰る途中で渋谷を見かけたから何してるのかと思つて声をかけた」

「物を忘れるイメージなんてなかったから、意外だね」

「普通に物を忘れることだってある。むしろ傘なんて、朝に雨の予防で持って来て帰りはそのまま良く置いて帰る：とか忘れる」

渋谷がそんな風に見てたのは俺も意外だ。忘れるからこそ家に予備用の1本を常に置いてるわけだが。さて、唐突かもしれないが：遠回しに聞いてみるか。

「今日はレッスンは休みなのか？」

「……………そうじゃないんだけどね」

言葉を濁らせる渋谷。これは：想像以上に深刻なのかもしれない。レッスンがある日なのに行つてないということは：学校で例えると不登校みたいなものだろう。

「何か：あつたのか？」

「……………」

何かあったことは改めて確信が持てた。ただ…何があったかは渋谷に話して貰うしかない。話すには躊躇うだろうから、しばらく硬直状態が続くかとは思ったが…そんなことはなかった。

「信じられなくなったんだよ。プロデューサーを」
「どうして？」

プロデューサーも関係してるのか。もしかしたら、渋谷の家に訪問しに行ったのかもしれない。

「私達3人のユニットの1人が辞めそうになって、でもデビューしたからにはユニットの3人で活動するのが当たり前で…。プロデューサーに私達がどうなるのか聞いても、はつきり答えてもくれない…」

みおさんが先日のイベントの後に辞めると言ったのだろう。その後、プロデューサーは恐らくみおさんを引き留めに行っている…と思う。昨日今日で2度すれ違ったが、引き留めに行ってるのかもしれない。

はつきり答えなかったのは…引き留められる自信がなかったから…？

はたまた迷っていたのかもしれないな。それに対し、彼女は失望してしまったのか。

「わけのわからないままアイドルになって、CDデビューまでしたのに…誰を信じたらいいかわからない…そんなのもう嫌なんだよ…」

今の渋谷の言葉を聞いて、一つ決定的に3人のユニットの中で違うことがあることに気付いた。島村さんやみおさんも恐らくそうだと思うが、自分から進んでアイドルになろうとせずだ。ただ、渋谷は違う。プロデューサーに導かれるままアイドルになった。興味や経験がある程度ある状態と、全く持ってゼロの状態。3人中でも普通の女の子の立ち位置だ。アイドルとしての自覚と覚悟が固まらないまま…短期間でのCDデビューまで果たしたが、いきなりこの展開だ。自分達がどうなるかわからないことに不安…恐怖のようなことを感じているのだ…と思う。誰も信じられなくなつて、346プロを飛び出してきて、悩んでいる、と言ったところだろうか。

かくいう俺自身も、渋谷がアイドルという意識が強い。でも：その前に同じクラスメイトの異性で友人だったな。そして：仮にもファン1号らしい。本人から承諾は得ていないが、本人の母親からほぼ認定されている。ファンとしてなら、アイドルは辞めて欲しくないと思う。友人としても同じだ。どうしても辞めたいというのなら止めない。ただ：アイドルを続けるのが辛いから辞めたい、というわけじゃない。なら、続けて欲しい方向で話をするしかない。

「渋谷のプロデューサーはさ、確かにはつきり答えなかったかもしれないし、迷うことだつてあると思う。そういつた姿勢を見れば、信頼が揺らいでも仕方ない」

自分で言うのもなんだが：年頃の女性だ。それも女子高生。プロデューサーが彼女にどのような言葉を伝えれば良いのか迷つたというのもあつたと思う。でも、それでも何とかしようとしているはずだ。でなければ、あんな雨の中で傘も差さずに走るとは思わない。

「それでも、もう一度信じてみないか」

「・・・え？」

「渋谷のプロデューサーを。自分でスカウトしたアイドルだ。俺なら必ず連れ戻しに来る。本人がアイドルがやりたくないつていうなら話は別だけど、信頼を失つたならもう一度作る。そうしたら、最初の失つた時にあつた信頼よりも、新しく築き上げた信頼の方が上のはずだ。渋谷のプロデューサーだつて、その辞めそうなアイドルの人も引き留めて、渋谷も連れ戻しに来るよ」

これで渋谷の元に来なかつたら：…というのは考えない。考えたくないつてというのが正しいかもしれないが。

「それに、その渋谷のユニットの他の2人もそうだし、普段一緒にいるアイドルの人達も信頼しよう。誰を頼つたらわからないなら、同じ境遇の仲間達を信頼すれば間違いないと思う」

少なくとも、俺が作つたお菓子仲間達で食べるくらいなのだから仲は悪くないはずだ。そういった仲間達を信頼すれば、誰を信じて、誰を頼れば良いかは少なくともわかるはず。もちろん、それは俺が考えたことであつて必ずしも正解じゃないだろう。でも、一番近くて一

番簡単な答えだと思う。

「信じていいのかな…あの人を」

「信頼されたければ、まず相手を信頼することから始まる…と俺は思ってる。それが正しいかどうかはわからないけどな」

「そこは言い切らなくて曖昧なんだ。ちよつと格好悪いよ」

「そうは言われてもな。何が正しくて何が間違っているのかなんて…判断つかないよ」

結局は人それぞれによつて持論があるのだから、そこは言い切つてもな。逆にそういう考え方があるのかと感心したりもする時があるくらいだ。

「それに、個人的な理由を言うのであれば、辞めて欲しくないからな」

「え？」

「しぶりん!!」

公園に響く第三者の声。俺と渋谷が同じ方向を見れば、パーカーを着た渋谷と同年齢と思われるショートカットの女性が来ていた。走つて来たのか、額に汗をかいている。彼女に数歩遅れて来たのは…同じように走つて来たのか、上着を手にかけている渋谷のプロデューサーだ。…ということとは、彼女がみおさん…でいいのか。恐らく話をしてほしいであろう二人のために、ほぼ自然と後ろに下がった。するとみおさんは渋谷との距離を詰めていく。対する相手もしっかりと目線を合わせた。

「しぶりん…リーダーなのに逃げ出しちゃって…迷惑かけてごめん！」

開口一番に謝罪の声。やはり、彼女はみおさんで間違いない。プロデューサーは彼女を引き留め、そのまま渋谷のところに来たのか。

「アイドル…続けさせて欲しい」

みおさんの不安そうな表情の傍ら、プロデューサーも渋谷の元へと一歩近づいた。昨日すれ違った時と違い、覚悟を決めたような…そんな表情が伺える。

「渋谷さん、貴方が言うように…正面から向き合うことから私は逃げていたのかもしれませんが」

正面から向き合うことは難しい。それが年齢も離れていて異性なら尚更な気はする。でも、それを言葉にしたということは…正面から向き合う覚悟が出来たということか。

「私は…アンタをもう一度信じていいの？」

渋谷もその覚悟を確認するかのようにプロデューサーを見据えて言葉を紡いだ。…しかし、年上にアンタってのは失礼だと思うが…それが渋谷らしいと思ってしまうのは何故だろう。

「努力します。もう一度、皆さんに信じて貰えるように」

そう言つて、迎えに来た彼女に手を伸ばすプロデューサー。それは…王子様がシンデレラを迎えに来た構図に見えるような気もする。

渋谷は手を伸ばしたが…その手を掴むことを躊躇っているのか、掴むまで伸びない。

「しぶりんー」

そこは、渋谷のユニットのリーダーであるみおさんが、手と手を取り合わせた。少し強引かもしれないが、こういう強引さも必要な時がある。…俺には出来そうにないが。

「明日からも、よろしくお願いします」

一件落着…か。信頼が戻るまではぎこちないかもしれないが、恐らくは大丈夫だろう。渋谷も再度覚悟を決めたのなら、簡単に折れはしないだろう。この経験が、彼女達の経験になってくれれば尚良しと言ったところだな。

結局のところ、俺が関わるかどうかなんて些細な問題だったのだ。俺が別に思考しなくても、なるようになったとは思う。ただ…俺は俺なりに何とかしたかった、というただの自己満足に過ぎない。

「ところでさ、聞きそびれたんだけど…」

明日からまたレッスン等に励むことになった渋谷。今日はそのまま解散ということで、今は帰宅途中。帰り道が同じ渋谷と俺は並んで歩いている。プロデューサーや本田さんと別れる際、貸した傘は返して貰った。

「何を？」

「…さつき、個人的には辞めて欲しくないとって言ってたけど…何で？」

「あー…そういえば…言ったな」

…そういえば、本田さんが渋谷を呼んだから理由は言っただけでなかった。今更聞き直してくるとは思わなかった上に、改めて言おうと思うと…何だか嫌だな。なお、「もしかして、しぶりんの彼氏？」と聞かれたが、「クラスメイトです」と即答しておいた。

「…まあ、なんだ、せっかく始めたのに簡単に辞めるってのは…早計じゃないかと思っただけだ」

「ふーん…でもそれだけじゃないよね？」

「…根拠は？」

「ない。でも個人的な理由って言ったんだから、そんな理由じゃないと思っただけ」

…やっぱり言わなきゃダメか。

「…渋谷は知らないかもしれないが…渋谷の母親から渋谷のファン1号認定されてな。まあ、確かに島村さんは同じアイドルだし、プロデューサーはファンとは違う。渋谷をアイドルに勧めた…というか後押し…したのは確かに俺だしな。そう言った意味では否定しきれなかったという点もあったから、否定はしなかったんだ」

「……………あの話、本当だったんだ」

溜め息混じりに呟いた渋谷。…俺も同じ立場なら溜め息くらい出たかもしれない。

「でも、そうだな。渋谷の母親には、渋谷が認めればって言ってたからな。認めてなければ特に何もなしだ」

俺も話しながら思い出したが、当の本人の決断はどうなのだろうか。渋谷の母親は既に自分の娘には話してるみたいだが。と、渋谷が三步ほど前に出て、こちらを振り返ったので、歩みを止めた。

「芳乃…アンタはどうなの？」

「…というところ？」

俺を見る彼女の視線は、目を見ているのだと思った。目の動きから何かを察しようとしているのかどうかはわからないが…彼女から目

を離す訳にはいかないと考えた。

「私が認めるかどうかじゃなくて、アンタ自身は…その…私のファンなの？」

「……………ああ、そういうことか」

要するに彼女が認めるかどうかではなく、俺自身がアイドル渋谷凪のファンなのかどうかと、そう問い掛けているのか。俺は彼女から視線を外して止まっていた足を進める。

「クラスメイトでもあるが、俺はアイドル渋谷凪のファンだ。これからも応援するし、お菓子の差し入れも続けるよ」

彼女の横を通り過ぎたところで、そう告げた。面と向かって言うのは正直無理だ。告白などしたことはないが、それに近い物なのかもしれない。彼女はその事を察しているのかいないのか、隣に来て顔を覗き込見ながらも視線を合わせようとする。

「じゃあ、私のファンなら…ステージ見に来てよ」

「ファンだからと言って、見に行かないといけないってことはないだろう。チケットも取れるかわからないしな」

「私が出るステージの時には、プロデューサーに席が確保出来るかどうか頼んでみるよ。無理には言わないけど…損はさせないから」

「…わかった。でも、損なんてしないとと思うぞ」

そこまで言われれば、嫌だとは言えない。俺自身も見て見たいという気持ちはある。アイドル渋谷凪のファンとして見るステージは、俺の視線にどう映るのか…見た後、どんな事を思っているのか。正確な答えはわからないが、一つだけ思ったことは…。

「だって、俺は渋谷凪のファンなんだから」

きつと、もつとアイドル渋谷凪のファンになることだけは、間違いないと思った。

第八話

週末の課題。その最後に手をつけ終わり、開いている冊子を閉じた。まだ休みの日が終わるまで余裕はあるものの、順調に消化をしてみたお陰で余裕を持って終わらせることが出来た。…消化している間は外に出る時間も少なかったため、今からは日の光を浴びたい。朝の日課であるランニングだけはしていたので、外に出ていないわけではないのだが。少し遠出…というか街の方に行ってみてもいいかもしれない。普段は近所で物が揃ってしまいうため行かないのだが、せっかくの夏休み、別のことをしても良いだろう。時間は善は急げ…とも言おうし、準備に取り掛かるとしよう。

……さて、割と遠くまで来た。来たのはいいのだが…別に何か用事があったて来たわけではない。なので、ウィンドウショッピング、という名の暇つぶしを試してみることにした。…高校生の男1人でそれはどうなんだという話ではあるが、じっとしていても仕方ないからな。

あの日以来、ニュージエネレーションズは立ち直ったらしく次のライブに向けてレッスンを重ねてららしい。らしい、というのには実際のレッスンを見た事がないためその表現をしているが…実際は技術を磨いているのだろう。ちなみに、そう言った事を察する事が出来るのは島村さんのお陰である、というのもメールを送ってくれるのだ。今日はレッスンをしたとか、この予定があるとか、同じプロジェクトの仲間達等の写真付きで送ってきたりする。ある意味定期報告みたいなものだが、お菓子を食べた際は毎回コメントをくれたり、たまに要望も送ってきたりするので、こちらとしては次のお菓子作りの献立になるので願ったり叶ったりだ。ただ、今日に関して言うなら、次にするものは決めてるし、材料も足りてるから買い足す必要はない。島村さんからは風邪が完治した直後に「凜ちゃん、彼氏さんだったんですか!？」とメールが届いたが、「クラスメイトです」とだけ返信しておいた。…恐らく、本田さんから詳しい事の次第を聞いたのだろうと推測

はしてる。本田さんにはちゃんと否定はしたんだけどな…次に渋谷に会った時に嫌な顔をされなければ良いんだが。

色々な店を見ていく中で購入したものは、医薬品というよくわからないことになった。こんな場所まで来て医薬品を買うつてのもどうなのかと思うが、最初から予定なんて決めていなかったようなものだ。家の必需品ではあるから、買って損はないだろう。むしろ、今まで家になかったんだよな…いや、風邪薬とかはあったんだが、外傷を治療するものがなかっただけで今まで必要としてなかったわけであるが…。そう思うと、良く怪我をしなかったものだ。毎朝のランニングもこけたことは一度もないし、そういうところは幸運なのかもしれない。

「…つと」

危なく目の前のしゃがんでいる人にぶつかりそうになる足を止める。しかし、こんな場所でわざわざ座り込んでいる理由はなんだ…と改めて見ると、帽子を被っていた。ただ、後ろから見ても金髪とわかるほど髪は長い。金髪の子が手に持っている携帯は、画面が割れていて電源がついていないのだが…どこかで落したりでもしたのだろうか？

そして付き添い人なのか、近くに同じくらい背で金髪の子と同じような眼鏡をかけている黒茶色の髪の子と、背丈は恐らく俺よりも大きく、同じく帽子を被っている女性の3人だ。…デジャビユと言えればいいのか、見たことがある気がする。しかも一人だけじゃなく、全員だ。

「莉嘉ちゃん、大丈夫？」

黒茶色の髪の子が視線を同じ高さにするためにしゃがむ。足の方を見ているので、足に視線を向けると炎症を起こしていた…恐らく靴擦れか。しかし、りかちゃん、と言ったか。髪色の金髪でりか、ということは城ヶ崎莉嘉か。渋谷と同じアイドルで、カリスマアイドル城ヶ崎美嘉の妹。

…思い出したが、デジャビユの正体は島村さんから送られてきた写真だ。同じプロジェクトのメンバーの写真を送ってきたことが

あるため、そこで見たことがあったのか。となると、背の高い方は諸星きらり、もう1人は赤城みりあか。

俺にとって彼女らは知り合いというほどではないし、向こうからすれば完全に知らない人だ。ちやうど仕組まれたみたいに新品の治療品があるし、声をかけても損はないだろう。

「靴擦れしてるな。ちよつと見せてくれるか？」

…なんと声を掛ければ良いか迷ったが、普通にすれば良い…はず。

中腰になりながら目線を下げ、怪我の状態を確認する。

「…えつと…」

「…お兄さん、誰？」

困惑する小さい2人。まあ、そうなるよな。警戒されるのが普通の反応だろう。とりあえず新品だったため、箱を開けてから渡すかどうか考えたが、買った時についてきた袋毎そのまま赤城みりあに差し出す。

「この中に治療できる物が入ってるから、これで治療してあげると良い」

「みりあちゃん、貸して」

彼女がそれを受け取ると、諸星さんがそれを手に取る。…それはそうか、諸星さんに最初から渡せば良かったな。怪我人の治療をしていく中で、本人は多少染みるのか目を瞑るのが伺えた。あまり見て良い表情ではないし、長居するのも迷惑だろう。

「それはそのまま使つて良いから。それじゃあ、俺は行くよ」

「お兄さん、ありがとう！」

立ち上がり、背を向けるとお礼の言葉が耳に届いた。恐らく、赤城みりあの声だろう。…確かあの子は小学生だった気がする。俺があの子の年代だと、状況を理解してお礼など言えただろうか。そう思うと、凄く賢い子なのかもしれない。しかしあの三人、考えれば身長の高低差があつて凸凹だ。

「もう少し、背が伸びてくれればな…」

諸星さんを嫌つてるわけではないが、なんとなく話辛さを感じていたのは…彼女には失礼かもしれないが、俺が欲しかったものを持つ

ていたからなのかもしれない。

「っ」

「あ、ごめん。アタシ急いでるから！」

それから5分も過ぎないうちにまたも人にぶつかりそうになる。今日はこういう日なのか、運が悪く感じる。今回はどちらかというと、相手の不注意ではあるのだが。人混みの多さも相まってか、その相手は走ることはずせ、早歩きでどこかに向かおうとしていた。帽子を被り、眼鏡をかけている。・・・よく見れば、さつき見た帽子と眼鏡によく似ている。後ろ姿の髪の色が桃色だ。まさか、本物のカリスマギヤルか？ しかし、仕事で来ているなら、こんな人混みの多いところをわざわざ一人歩くこともしないだろう。・・・もしかして、探しに来たのか？

「城ヶ・・・」

後ろを振り返り、呼び止めようと思ったところで自分の発言を止める。浅はかだな、俺は。こんな人混みで名前を出したら、カリスマギヤルの知名度だと大騒ぎになることは間違いない。少し気が引けるのだが・・・上手く人混みを避け、手を直接触らないように服の裾を掴む。

「え、なに!？」

・・・事は上手くいかず、思いっきり腕を掴む形になった。服の上からではあるが。急に腕を捕まれ、驚いたであろうカリスマギヤル、城ヶ崎美嘉さんがこちらを向いた。

「悪い、突然腕を掴んで。貴方、妹さんを探してはいないですか？」

掴んだ腕を離し、自分よりも年上だったと思いつつ、途中で敬語で話しかける。実年齢は知らないが、恐らくは年上だろう。

「莉嘉がどこにいるのか知ってるの!？」

とりあえず、本人の空似ではなく間違いない本人だとは判明したのだが、よほど焦っているのか今度はこちらに迫ってきた。近い、顔が近い!

「落ち着け！何をそんなに慌てるのか知らないが大事はない！」

「大事はないって何!? 怪我してるの!?!」

「ああもう！俺の言い方が悪かったからとりあえず落ち着け!!」

いくら変装しているとはいええ、カリスマギャルと世間から呼ばれている相手に、ここまで詰め寄られるとこちらも焦る！ 周りが何事かところらを見ているため、とりあえず頭を下げておいた。城ヶ崎美嘉も少しは落ち着いたらしく、少し距離を取っている。

「とりあえず、妹さんと別れたのは数分前です。それから、靴が合わなかったのか軽い靴擦れを起こしていたんですが、それに関しては偶然治療品を持っていたので、諸星さんに渡して治療して貰ってます。ちなみに場所は、真っ直ぐ行ったところですよ」

渡した相手が違うが、治療していたのは諸星さんなのだから説明としてはこれで良いだろう。

言葉を聞き、一息吐く姉の方。改めて見るこちらの視線は、幾分か疑いが晴れたように思う。

「教えてくれてありがとう！」

これで合流出来るといいのだが。妹に会いに行くためにその方向に向かう姉。しかし、あそこまで心配される妹となると、姉妹の仲は良好のように思える。普通の姉妹がどうなのかは知らないが、姉妹でアイドルで仲が良いのなら、二人で歌って踊るステージも近いうちに見えるかだろう。

しかし、久しぶりに遠出してみれば、アイドル4人を見かけるような事態になるとは。普段であればありえないだろう。・・・とも思ったが、平日は同じクラスにアイドルが在籍しているし、また別のアイドルからメールが来たりしている。もしかしたら、俺はとんでもない境遇にいるのかもしれない。

そんな思考をしながら歩いていると、背後で大きな歓声が鳴り響いた。きつと、それがアイドル達によつての歓声なのだろうと思いつつ、俺は家に帰る道を歩き出した。

週は明け、1週間の始まりの曜日の登校。特に学校に行く際に憂鬱

になることはなかったのだが、今日は人生で初めてかもしれないほど憂鬱だった。

・・・学生証がないのだ。

実のところ、学生証はバスに乗ったり電車に頻繁に乗ったりもしないもので、今ひとつ役に立った試しはないのだが、そんな学生証をなくしてしまった。財布の中に入れておいたはずなのだが、今日家を出る際に財布の中を見ると、学生証を入れておいたスペースが完全に空だった。

流石に学生証がないことを報告しないわけにもいかないため、今日は少し早めに登校しようと思ひ、家を出たのだ。もうすでに夏服になり、高校生になって初めての夏休みが近づいて来ている。そろそろ家のクーラーでも掃除をしようかと思ひ通学路を歩いていると、ここで見かけるには珍しい姿が見える。昨日会った4人の中にはいなかったが、その4人の所属する事務所と同じアイドルだ。こちらの視線に気づいたかのようにこちらを振り向く。

「おはよう、渋谷」

「・・・おはよう。忘れ物、渡しに来たよ」

一度、立ち止まり挨拶をする。友人でも待ってるのかと思つたが、どうやら俺に用があつたらしい。向かう先は同じため、自然と横並びに並ぶ。しかし、忘れ物？何か渋谷に対して忘れ物があつた記憶はないが・・・。

「これ」

「・・・おい、マジか」

と、短い言葉で渋谷のポケットから出されたのは、俺の学生証だった。自分の学生証など、貸す理由はないし、何故彼女が持つてるのかと思つたが・・・。

「袋の中に入ってたか・・・」

「正解。きらりが持つてた袋に絆創膏とかと一緒に入ってるからビツクリしたよ」

知り合いの学生証が会つたことのないはずの人が持つてたら驚くだろうな。しかし、何で袋の中に入ってたかは謎だが。考えてもわか

らないだろうなこれ。

「芳乃ってこういう時に限って抜けてるよね・・・普段はそんなことないのに」

「そうそう完璧超人なんているか。俺は少なくともその類じゃない」

学校のテストでも1問だけ間違えていたり、数学の途中式の計算がよくわからないところでミスしてたりな。俺だって間違えたくて間違えてるわけではない。

「莉嘉達が、ありがとう、って言ってたよ。特に莉嘉とみりあちゃんは実際に会って作ってもらいたいお菓子があるって言ってたから」

「カリスマギヤルの妹に会いたって言って貰えるなら、それは光栄なことだな。・・・って、そこまで話したのか」

「卯月がね。卯月経由でまたメールが来るんじゃないかな」

実際、カリスマギヤルの妹に会いたって言って貰えるくらいなら、あの時の絆創膏と軟膏は無駄にならなかったってことだろう。むしろ、お金の価値だけで比べるくらいならお釣りが出るくらいだ。まあ、実際会えるかどうかは別問題なわけだが。

「まあ、とりあえずありがとうな。わざわざ持ってきてくれて」

「別に・・・これくらいはいいよ」

渋谷が持つてる学生証を受け取る。これで、心配事がなくなったため、嫌な気分のまま授業を受けずにすむ。しばらく歩き、もうすぐ学校が見えてくるところで、歩行者信号が赤に変わり、足が止まる。

「聞きたいことがあるんだけど」

すると、渋谷が不意に口を開いた。別に質問くらいなら前置きはいらないのだが、一体なんだろうか。

「なんだ？」

「・・・三人以外にも、美嘉にも会ったんだよね？」

「ああ。三人と別れた後にな」

「その時、随分と焦ってたって聞いたんだけど」

「・・・焦ってたのはどちらかというのと、向こうだと思っただが」

というか、城ヶ崎さんとも会話するのか。やはり同じ事務所ということもあり、接する機会はあるんだろうな。

「年上だつて知つてた割には、莉嘉のことを聞いた時に敬語も外れて顔も赤くなつてたつて言つてたから……」

「……待て、いや、否定はしないが……」

年上つて知つてたつてよく気づいたな……ああ、妹さんの情報を伝えるときに敬語で話したからか。しかし、何故そんなことを城ヶ崎さんは渋谷に話したんだ。

「……仕方ないだろ。世間からカリスマギャルだつて言われてるアイドルが、それこそ目の前にいたんだ。緊張はするし、焦りもする」

むしろ俺と同じ状況で緊張や焦りもしない人がいるのかどうか、ウチのクラスの男子でアンケートを取つてみたい。多分、結果は満場一致だ。

「……ふーん」

正直な意見を言つたつもりなのだが、渋谷本人はどうやら満足のいく答えではなかつたらしい。信号が青になり、足を前に進める。……明らかに渋谷の歩く速さが加速している。

「……というか、ふーん、つてなんだ。質問に答えたのに明らかに興味ないみたいな反応だなおい」

「……別に、なんでもない」

「その反応見て、なんでもないつて思えるわけが……つて、おい待て！」

結局、渋谷はこの日は何を聞いても理由を答えてくれることはなかった。何が彼女の機嫌を損ねたのかはわからなかつたが、とりあえず彼女の好きなチョコレートを存分に使つたお菓子を作つて機嫌を直して貰うことにしよう。

もうすぐ高校生になり初めての大型連休の夏休みが始まるということもあり、渋谷達のアイドルとしての活動はより活発化するだろう。出演するステージの際はプロデューサーに頼んで席を用意するように頼んでみると、そう言っていた。夏休み中に、彼女たちのステージを現地で見る機会があるのかもしれない。現地で彼女が歌つて、踊る姿を見て、俺はその時に何を思うのだろうか。……せめてその時には万全の状態で行けるように、大量に出されるであろう課題

を、早めに済ませてしまおうと決意した。

第9話

学校は既に夏休みに入り、夏真っ盛りでエアコンも扇風機も今が一番稼働期、というこの季節。

俺は夏休みに学校から指定された課題を全て終わらせていた。こういう時に普段の予習や復習がためになるし、日々の積み重ねは大事だと改めて思うことが出来た。毎朝のジョギングもこなしてはいるが・・・あまり気温が上がつてると時に走るのは避けたいため、朝の起床時間をいつもより早く起きるようにして、涼しい時間帯に走るようにしている。夏休みに入る直前からこの試みを実施した・・・のだが、一つ問題があった。

いつも走つた後にシャワーを浴び、学校がある期間はその後登校していたのだが、ある日、時間に余裕があると思いが抜けたのか、二度寝をしたのだ。次に意識が覚醒して時計を見た瞬間、とりあえず着替えて学校まで全力で走つたのは記憶に新しい。シャワーを浴びたのが意味を成さないくらい汗をかきながら、教室の扉を開けた時には、先生が既に出席確認をしてる最中だった。

「芳乃がギリギリに登校してくるなんて珍しいな」

とクラス全員がこちらに注目している中で、代表者として発言したような感じだった。先生からは順番が来てなかったため、遅刻扱いにはされなかったが、せめて学校が終わるまでは普段通りの時間帯に行おうと決意した瞬間だった。その事の顛末を彼女に聞かれた際に、詳細を説明すると

「試みは良いはずなのに・・・この前もそうだったけど、どこか抜けてるのが芳乃らしいよ」

と笑われがちに言われた。・・・別にいいのだが、バカにされている気がする。・・・別にいいのだが。

そんな彼女・・・渋谷凜の同じユニットの島村さんから以前連絡があったのだが、『346プロIDOLサマーフェスティバル』というのが開催され、そこにユニットとして出演することだ。彼女達のユニット名であるニュージェネレーションを始め、以前に見かけた凸凹

の三人の凸レーション、それにCANDY ISLAND、LOVE LAIKA、Rosenburg Engel、Asteriskと言った渋谷達の所属するプロジェクト全員と、城ヶ崎さんを含む先輩アイドルも何人か参加して行うとのこと。詳しいわけではないが、規模的には大きいのだと思う。彼女たちのプロデューサーが、その分のチケットを用意してくれたとのことだ。翌日がフェスなのを控え、用意して貰ったチケットを受け取りに向かっている。まだ日は昇っているが、あと1時間もすれば街灯が点灯しだす時間に、待ち合わせ場所の公園へと到着した。少し早めに来たが特に問題はないだろう。ちゃんと、渡すものも持ってきている。

「芳乃さん、こんばんはー!」

「久しぶり、島村さん。渋谷も・・・まあ、久しぶりに見た気はするな」
「確かに、学校では毎日顔を会わせるから、そんな感じはするね」

「芳乃さんと顔を会わせるのは久しぶりですけど・・・メールでやり取りをしているので、そこまで久しぶりに会うって気はしないです!」
数分後、二人で並んで到着した。レッスン終わりというのに、島村さんはこちらに笑顔を見せてくれる。この印象に残る笑顔を見るのも久しぶりだ。実際、島村さんに会うのは二カ月以上前だ。学校が一緒ではないし、こういう機会がなければ会うことも難しい。ただ、メールでは割とやり取りをしている。毎日というわけではないが、同じプロジェクトのメンバーのライブを見に行っただとか、お菓子のリクエストの連絡だったりとか・・・最近は合宿に行ったらしくその風景の写真付きで送信してきたくらいだ。そのお陰もあってか、彼女の所属するプロジェクトのメンバーの顔と名前は一致するようになってる。

「そんなにやり取りしてるの?」

「はい!その時あったことを思い出しながら送ってたら、楽しくなってます。この前は電話もしたんですよ!」

夏休みの課題中に着信音が鳴って相手を確認せずに通話ボタンを押したら、島村さんの声がしたから、あの時はかなり驚いた。なんせ、「びっくりさせちゃいましたか?」、と電話越しで聞かれるくらいだ。

内容は、送ってくるメールの内容と大差はないのだが。メールだと、こつちが返信して大体終わりなのだが、彼女の話に相槌をしながら、たまにこつちの話をするといつの間にか時間が過ぎていた、というのが島村さんの言う電話のことだ。

「俺としても必要な情報をくれるからな。助かってるんだよ」

「・・・そうなんだ」

島村さんとのメールのやり取り自体は、ただの報告と言うわけでもなく、彼女のその時思ったことも書いてくるものだから、内容を読んでいる俺も共感・・・というわけではないが、その当時の心境が伝わるため、こちらも楽しくなってくるのだ。

「・・・とりあえず、明日のチケット渡しとくよ」

「ああ。プロデューサーにもお礼を言っておいてくれると助かる。それのお返しと言ってはなんだが・・・ほい」

渋谷からチケットを片手で受け取ると同時に、ラッピングした品物を差し出す。少々戸惑いながらも、渋谷はそれを受け取った。正確な人数を把握出来なかったため、少し多めに用意してあるのだ。

「今回は、袋が大きいね」

「出演者が何人いるかわからなかったからな。多く作って、一つ一つ袋詰めしたら、大きくなっただよ」

「これ、中身は何ですか？」

「マフィン。言ってしまうえば、生地を作った後に中身を紙コップに流し込んで焼いたっていう単純な物」

「・・・相変わらず、女子力高いね」

「凜ちゃん、私もう既に負けてると思います・・・」

女子力が高いと言われると嬉しい気はしないのだが。男気があるとか言われた方がまだ嬉しい・・・と思う。実際、言われたことはないが。味見はしているので、美味しいかどうかについては問題ないだろう。二人が落ち込んでるのか感心してるのかは知らないが、補足説明だけはしておこう。

「シンデレラプロジェクトが13人だろうか？ 後は渋谷達の・・・先輩の方々になるのか。その方達が何人参加するかわからなかったから、

その数も作っている。余ったら分けるなりプロデューサーに渡せばいい」

まあ、女性にとってデザートは別腹、というのを聞くので食べきれらるだろう。俺には縁のない言葉ではある。

実際に、夕飯を食べた後にお菓子作りを行い、味見のために試食を行ったらお腹を壊し、トイレに籠るといふ事象が起きたのだから間違いない。

ほどなく、用事が終わったということもあり解散ということになった。また連絡しますね！、と島村さんが帰り際に言っただけだが、彼女のことなので明日のライブが終わってひと段落したら、またメールでも来るのかもしれない。それはそれで楽しみにしている自分がいるのだが。

「・・・あのさ」

島村さんとは別れたが、渋谷とは同じ方向のため自然と一緒になる。今思えば、渋谷と帰り道を共に歩いたことなんて、恐らく初めてだ。普段、彼女は放課後そのまま事務所に行っているのだからこういう機会は遭遇したことはない。以前、登校を共にしたことがあったが、あれは渋谷が俺の学生証を渡しに来たという明確な要件があったからだ。

「・・・何か考え事してる？」

「あ、悪い。大したことじゃないんだがな。で、どうかしたか？」

どうやら渋谷は俺に話しかけたらしい。わざわざ顔を覗き込んでくるものだから、驚いて少しだけ早口になったような気がする。いつの間にか、彼女の家の前まで来ていたことに気付いた。それほどあの公園から距離はないのだが、思ったよりも考え込んでいたようだ。

「今更なんだけどさ・・・お互いの連絡先、知らないよね」

「・・・確かに」

言われてみれば、渋谷とはメールのやり取りや電話で話したりなどはしたことがない。今は長期休暇なので違うが、平日の学校で毎日顔を会わせていた。なので、毎日ではないにしても、用があれば、俺も渋谷も互いに話し掛けていた。それで今まで特に困ったことはないの

で、そこに気付くこともなかった。

「そういえば、前にお母さんから言われてハナコの散歩を手伝った時って、どうやって頼まれたの？」

「ああ、あの時は渋谷の母親から連絡があったからだな」

「・・・なんでお母さんが知ってるのかって思ったけど、花の関係？」

「そういうこと。事前に貰いに行くときは連絡するようにしてる」

突然言行っても問題はなさそうだけど、取りに行く前には一応連絡をするようにしている。まあ、断られたことは一度もないのだが。夏休みの間にも行ったが、あの時は俺のほかにお客の人がいたので、用意して貰った花だけ受け取って帰ったな。・・・しかし、クラスメイトの番号を知らずにそのクラスメイトの母親の番号を知っているって、自分で言うのも何だが、特殊なケースな気がする。

「・・・俺の連絡先が必要になった場合は、渋谷の母親に聞けば・・・いや、流石にないな」

絶対に弄られる。彼女は間違いなく、俺も会った際に同じ目に高確率で遭うだろう。

「・・・あの時も相当問い詰められたんだから・・・」

「あの時？」

「・・・学生証。学校の中で渡すのは気が引けたから、もしかしてお母さんなら知ってるかもって思って、芳乃の家の方角を聞いたんだよ」
「だから俺の通学路で待ってたのか。・・・というか、その時点で俺の連絡先を知ってれば良かったんだな」

実際に渋谷の母親は来たことはないが、俺の家の場所まで知っている。確か、以前に一度聞かれたことがあって伝えたことがある。・・・学生証を届けてもらう、なんてことは二度もあって欲しくはないが、渋谷に連絡先を伝えておいて損はないだろう。

「俺の番号とアドレス教えとくよ」

「いいの？」

「前回のようなことは稀だけど、今後連絡を取り合う必要がある時が来るかもしれない。それに、花を取りに行く時だって店の方に電話しなくても、渋谷のほうに連絡して伝えて貰ってもいいからな」

お店の電話に連絡するよりも、同じ家に住んでる人に伝えて貰ったほうが、わざわざ電話を取る手間もなくて良いはずだ。取りに行く日も、余裕を持って数日前に連絡すれば問題ないだろう。

「送ったけど、届いた？」

「大丈夫だ」

携帯に着信、メールが来たことを確認したので、彼女の連絡先を登録する。同級生の異性と連絡先を交換する機会はないな。少なくとも、高校に入学してからは二人目だ。一人目は島村さんである。

「・・・ちよつと話し込んだな。明日は本番なのに、悪かった」

「いいよ。元はと言えば、私が話題を振ったようなものだから」

今更だが、家の前で話し込む、いうのも悪いかもしれないな。今日は既に閉店しておりシャッターも閉まっているから、問題ないとは思うが。

「そうか。まあ、メールでも電話でも何かあったら・・・というか、雑談でも何でも連絡してくれて良いからな」

「うん。私の方も別に連絡してくれて構わないから」

彼女はそう言っているが、俺から連絡するのは花の受け取りに関することだけだろう。島村さんに対してもそうだが、二人ともアイドルとしてだけでなく、学生としての生活もある、普段の勉強とかの妨げになるようなことでもないかもしれないが、こちらからの連絡は控えている。現に、島村さんに対しては返信しかしたことはない気がする。・・・そろそろ本当に帰ろう。

「じゃあな。明日は・・・怪我しないようにな」

「そんな気を遣わなくてもいいよ。でも、ありがとう」

頑張れ、とか、期待している、とかだと気負いするかと思っただが、悟られてしまった。まあ、この渋谷の表情を見る限り大丈夫だろう。そんな確信を持って、俺は自宅へと足を向けた。

・・・後日、渋谷の母親から、自分の娘に連絡先を教えたことを弄られるのは、また別の話である。

翌日の天気予報で雨という予報はなかった。朝、家を出る際に再度天気予報で確認したのでそれは間違いない。ただ。現状で雷雨に見舞われている状況は、ここにいるほとんどの人達が予想出来ていなかったのではないだろうか。

野外フェスの会場でそれは起こった。開催前から快晴で始まった。順調に進み、渋谷達と同じプロジェクトのメンバーである、ラブライカが歌い終わった直後だった。正確に言うのであればラブライカではなく、今回は編成を変えたのか、ラブライカのアナスタシアさんと Rosenburg Engel の神崎蘭子の二人で、ラブライカのユニット曲である Memories を歌い終わった直後だった。青空だった空が暗くなり、大雨が降り始め、雷まで鳴る始末だ。この状態で続行するはずもなく、一時中断となり観客のほとんどは屋根がある場所へ避難している。避難していないのは、雨合羽を着ている人と、折り畳み傘を準備していた俺くらいだろう。出歩く時に持参しているバックの中に折り畳み傘が入ってるのだ。用意しておくことに損はない、と言った理由ではあるが今回は役に立ったというわけだ。

通り雨らしく、雨はすぐに止まった。だが、瞬間的な雨量は多く、ステージ上には水捌けが必要だったのだろう。会場のスタッフの何人かが作業を行っている。恐らく、時間の都合の問題もあるかもしれないし、大幅な延期は出来ないかもしれないため、作業が終わればすぐにでも続きを行うだろう。その場合、避難している人達がすぐに戻って来るかどうかは微妙なところかもしれないが。

「こんにちはー！」

スタッフが舞台裏に下がり、数分後にステージ上から聞こえる三人の声。俺にとっては、全員面識があり、会話を交わしたこともある。「ニュージエネレーションズです!!」

ステージ上に立つその姿は、緊張している様子は見受けられず、まだ観客が完全に戻りきっていないのに、表情は今から楽しみで仕方がないという表情だ。

「待っていて下さって、ありがとうございます!!」

「雨、大変だけど、盛り上がるように頑張ります!!」

「聞いてくださいー!」

立て続けに彼女達が一言ずつ発していく。…俺が初めて見る、彼女達のステージが始まる。これは、間違いなく俺が見たかった光景である。

ただ、何故だろうか。きつと、俺から見ても彼女達から見ても、そう離れていない位置にいる。下手をすれば、俺がこの場所にいることに気付いているかもしれない。

「できたてEvo! Revol! Generation!!」

それなのに、渋谷を…彼女達をこれほどまでに遠く感じたのは、初めてだった。

終わった後は静かなものかと思っただが、そうでもない。一緒に来た人とその日の感想を言い合ったりしているのか、色々な角度から聞かえてくる。

クラスメイトのアイドルが出演している、野外フェス、346プロIDOLサマーフェスティバルは突然の雷雨があつた以外は、無事に終了した。勿論、観客視点からの見た判断ではあるがそうだと思う。季節は夏真っ盛りだと言うのに、その暑さに負けないほど会場は盛り上がったと思う。俺自身はその熱狂に飲まれていたが、十分な高揚感を味わった。こんな経験は初めてではあるし、ライブでしか味わえないというものもあるのだろう。改めて、チケットを用意して貰ったプロデューサーを含め、渋谷や島村さんには感謝をしよう。

「凄かったなー…」

「ニュージエネの渋谷凜って子、同じ中学だったんだよね」

会場から離脱している途中、ふと聞き覚えのある名前が聞こえたため視線をそちらに向ける。

クルクルとウェーブのかかった髪を二つ結びしている後姿が視界

に入る。その隣に、もう一人髪の毛のボリュームが多いと見た目で分かる人は、友人だろう。そして、声と髪から判断するに異性だ。さすがに同性であるような髪を結んでいる人は見たことがない。そして彼女達もまた、渋谷凧のファンなのかもしれない。

ただ・・・あの二つ結びをしている、コロネみたいな髪型は覚えている。同じ学校ではなかったが、別の場所であったことがあるのだ。・・・こちらには気付いてないみたいだし、人混みがただでさえ多い状況だ。声を掛けて足を止めるのは、俺よりも後ろの人達に迷惑がかかるだろう。

「・・・しの？」

人混みが疎らになる前に、知っている声か、耳に届いた気がした。

家に帰り着いたところで、今日の夕飯の材料がなかったことに気付いたが、今日は作る気力もなかったため、水分を補給し、シャワーで汗を流してベッドに横になった。初めてのライブに参加して、慣れないこともあったのか体が疲れているのを改めて感じる。このまま、すぐにでも眠れそうさ。

「あれは間違いなく、北条加蓮だな」

誰もいない家で、独り言を呟いた。

顔を実際に見たわけではないが、本人で間違いはないだろう。姿を見かけたのは、実に1年数カ月振りだ。

北条とは、病院で会ったことがある。母親が入院している時に同じ部屋だったので、最初は母親が彼女によく話しかけていた。彼女は元々、幼少の頃から体が弱かったらしく、体調を崩すと周りから過剰に心配されたそうさ。俺と知り合った時も、体調を崩しての入院だったと聞いていた。母親が食べるお菓子を作っていた時に、ついでだからと彼女の分も一緒に作っていった・・・というのが知り合うきっかけだ。元々彼女は数日間の入院予定だったので、予定通りに退院した。母親が亡くなったのはその後だ。しかし、今日の状態を見る限

り、外で友人と歩き、言葉から察するにライブにも参加したのだから、体の状態は良いのだろう。もしかしたら、運動をして体力がついてきたのかもしれない。・・・今更ながら、声をかけてもよかったのではないかとも思ったが、あの時の気分はそうではなかった。

原因は、あのライブで間違いない。だが、今一つ、どうしてあのように感じてしまったのか理由はわからない。距離は表情が確認出来るほど近かった。それは間違いないはずなのに、果てしなく遠く感じた。距離の問題じゃないとして、何が俺にそう感じさせたのか。・・・一旦、落ち着こう。これはきつと今疲労している状態で考えたところで、答えは出ないし、無視しよう。それが逃げる行為だということは理解していたが、今は得策だと思っていた。

まだ長期間間の休みなため、明日も当然の如く休みである。一度は眠ろうと思ったが、甘い物が欲しくなったためココアを淹れて戻ってきたところで、メールを受信している殊に気付いた。

まだ起きてる？

確認すると、クラスメイトで花屋の娘のアイドルから来た初めてのメール。

それはこちらが寝ていないかの確認のメールだった。とりあえず寝てはいないので、起きている、と簡単な返信を返す。すると、すぐに今度は電話がかかってきた。・・・疲れてるはずなのに、何か用でもあったかと思いつつも通話ボタンを押した。

「・・・渋谷か？」

彼女の携帯から連絡が来たにも関わらず、確認を取る。別に疑っているわけではないが。

「・・・うん。夜遅くにごめん」

「それはいいが、何か用なのか？」

彼女の方がよほど疲れているだろう。俺は演者の姿を見ていただけだ。演者側は観客側の比ではないだろう。

「直接、聞きたいことがあったから。・・・今日、どうだった？」

なるほど。今日のライブの感想を直接聞きたかったらしい。島村さんから電話が来るかとは思ったが、渋谷から来るのは予想外だっ

た。

「楽しかった。ありがとな、貴重な体験をさせてもらって。プロデューサーにもお礼を言っておいてくれると助かる」

あの昂揚感を表す的確な言葉はこれが妥当だろう。他の言葉は恐らくいらぬと思う。

「渋谷は・・・楽しかったか？」

良い機会だから聞いてみようと思った。数カ月前に突然始まったアイドル生活。時間が過ぎてここまで来た。今、このような野外フェスを経験して、渋谷自身は楽しめているのか、それが気になった。答えは、聞かなくても大体は想像出来ているのだが、敢えて彼女の声で直接聞きたかった。

「楽しかった・・・かな」

俺が抱いた感情を全て伝えたわけではない。

あの感じたことを伝えたところで、彼女にとって意味はないだろうし、これは俺自身の問題だ。

それよりも、彼女から電話越しに聞こえた言葉が、貴重だと思ったのは気のせいではないだろう。

それが聞けただけでも、今日という日が良い日だったというのは間違いない。

第10話

夏休みも残り1週間を切った頃、宿題を前に終わらせている身としては時間を持て余していた。日々の復習は行っているが、それだけでは当然暇だ。ゲームの方も無事にクリアしたので、現状でやるソフトはない。お菓子作りもやっているが、毎日行いうわけでもない。・・・己の趣味の少なさが発覚した瞬間だった。数日間は慣れない筋トレや前学期の総復習などで時間を消費したが、もう手詰まりだ。幸いにも、今日は渋谷の家に花を取りに行く予定はあるし、そこで渋谷の母親と話せば時間も消費できるのだが。もし話す暇がなければ、ウィンドウショッピング的なことをすることにしよう。・・・取りに行く時間も事前に連絡しておいたので、事前に準備はしてくれてるだろう。

「芳乃君、今日時間あるかしら?」

「この後は何もありませんけど、何かありました?」

と、お店に行った際に話しかけられた一言。今、お客は俺以外にいないが・・・雑談の際にはこのようなことは聞かない。だとしたら、何か用があるということだ。以前みたいなハナコの散歩だろうか?」

「凜のことなんでしょう?」

「・・・なんででしょう?」

少し考えてみたが検討がつかない。この所は2、3回例の物は渋谷の元へと渡している。と言っても、野外フェスが終わって以降、渋谷の母親経由で渡してもらっているため本人には会っていない。島村さんには数日前に偶然にも夕方に一度会ったため、そこでライブに参加した感想を直接話したのだが。

「このところ、忙しかったじゃない? だから、夏休みの課題が終わってなさそうなのよね」

「俺から見ても十分忙しそうでしたからね。渋谷には直接聞いてみたんですか?」

「ええ。凜には言わないで欲しいんだけど、アイドルを初めてから成績が少し落ちてるのよね。まあ、私としてはそんなに気にしてはない

んだけど、このまま落ち続けるとしたら流石に親としても見過ごせない事態になりそうだから。早めに手を打っておきたいのよ」

「そういえば、勉強面については話したことがない。そのため、渋谷の元の成績は知らないが、下の方ということは無いだろう。悪くても中の上、というイメージではある。」

「まあ・・・アイドルとして活動している以上、塾に通うことや家庭教師を雇うことも難しいでしょうからね」

「経済面の問題ではなく、時間としての方が無理があるだろう。・・・：
「そういえば、渋谷や島村さん達って、給料的な物を貰っているのだからか。」

「そこで、芳乃君に勉強見て欲しくて。芳乃君なら凜も拒否はしないと思うから」

「断られたら傷つきそうなので聞きたくない、という理由で拒否権を行使したいんですが」

「拒否権、あると思う？ あと、芳乃君は既に夏休みの課題については終わってると思うからって言う理由も付け加えるわね」

「・・・その予想が当たっていることが何とも言えないですが・・・」
「というか拒否権ないのか。やっぱり、渋谷の母親に勝てる気がしない。そもそも口で勝ったことなど記憶上ではない。降参の意味も含めて、両手を上げる。」

「まあ、それとなく聞いてみますよ。夏休み残り少ないですけど、タイミングが合えば直接教えるっていうことも出来そうですから」

「芳乃君、知らないの？ 凜は今日は休みだから、今部屋にいるのよ」
「・・・すっごい偶然ですね」

「渋谷が今日オフの日だとは知らなかった。アドレスと電話番号は知っているのだが、こちらから連絡するのは花を受け取りに行く日付と時間を連絡するだけなので、彼女のスケジュールなどは知らないのだ。」

「凜——芳乃君が来てるわよー！・・・じゃあ、後はよろしくね」

「渋谷の母親が娘を呼びかけ、都合が良いのか悪いのか、ちょうど顧客が来店して対応に戻っていく。と、同時に家の方から足音が聞こえ

てくる。・・・まだ、どうやって課題の話をしようか考えている最中なのだが。

「今日は花を取りに来る日だったね。・・・私に何か用？」

彼女が俺の姿を認識すると、そう俺に視線を向けて告げた。当然、私服なのだが、どうしても制服のイメージが強いので逆に新鮮ではある。

「・・・渋谷さ、夏休みの課題はどうだ？」

まあ、考えても良案は出てくるわけがなかったため直球で聞いてみることにした。

「終わってないから今やってるところだけど・・・それが？」

「まあ、なんだ。最近、アイドルの方で忙しかったから、どうなんだろうと思ってるな」

「・・・もしかして、お母さんから何か言われた？」

「いや、別にそういうわけ・・・です、はい」

渋谷相手に簡単な嘘は吐けない、吐いたとしてもすぐにバレるだろう。元々、俺自体が嘘を吐くことが得意ではないしな。渋谷は目に見えてため息を吐いている。・・・一体、何に対してのため息なのか。

事情を説明し、家にかかることを許された俺は渋谷の部屋・・・ではなく居間にいた。思えば彼女の部屋ではなく、居間の方が広いため、わざわざ部屋に行くこともなかったのだ。部屋に行くことしか頭になかった自分の何とも浅はかなことか。

「何でため息ついてるの？」

両手に課題と教材を抱えて持ってきた渋谷は、俺の様子を見てそう疑問を問いかけてきた。思ったことをそのまま言うのは流石に躊躇われたので、誤魔化すことにする。

「気にしないでくれ、大したことじゃない」

「・・・そう。でき、とりあえず終わってない課題は持ってきたけど・・・自分の課題は終わってるの？」

「終わってる。まあ、多少の間違いはあるだろうけど、戻ってきた後に

また見直せば良いだろ」

最初から完璧に回答出来るとは思っていない。むしろ、間違った箇所を見直して正しい回答を知るほうが身になる気がする、一度正解した問題を解き直すということもするだろうが、前者の方が知識としては残

るだろう、というのが自分の考えだ。

「で、それが残ってる課題か」

机を挟んで対面側に座ってる位置から、彼女が持参している物を視認するが・・・残っている物はそこまで多くなさそうだ。中身は白紙などであれば大問題だが、そのようなことはないだろう。

「わからないところがあつたら聞いてもいい？」

「聞くことがなかったら、俺がいる意味がないからな。既に終わってる課題で聞きたいことがあつたら聞いてもいいぞ。教えられる範囲で、だけだな」

そう、と短い返答をして渋谷は目の前の課題に取り組み始める。聞いてくる間までの間、どうしたものかと考えたが、彼女が解いている課題を頭の中で解き直すことにしよう。

彼女の集中力は高いらしい。あれから、数時間経過しているが、質問をしてくる時以外、目の前のやるべきことから視線を離さず、空白の箇所を埋めていた。・・・課題を解いている間、何か所か解答が異なっている箇所を発見したが、俺も間違ってる可能性があるため口には出さなかった。・・・家に帰って覚えていたら、解き直してみるとしよう。

「・・・一旦休憩」

集中力の限界だったのか、キリが良かったのか、課題から目を離して一息吐く渋谷。そして、その場から立ち上がって別の部屋へと移動した。俺も座りっぱなしだったので、座ったまま背を伸ばす。書くことをしないで頭の中の自分の知識と計算力だけで解くというのは、正確な計算が出来ているか不安にはなるが、頭脳を働かせるには中々役立つとは思っている。ただ、書くことをしないというだけで本当にそ

れが自分のためになつていてるかというのは疑問に思うのだが、何もしないよりはマシだとは思ふことにしよう。

「ジュースもあるけど、麦茶で良かった?」

と、麦茶が注がれたコップを差し出された。まだ飲んではいないが、この季節にとつて喉を確実に潤すための美味しい一杯だ。

「ありがとう、むしろ麦茶で良かった。ジュースは飲まないからな」

礼を言つて差し出されたそれを受け取る。氷も入れられており、冷房が入っている部屋でも、手に触れた瞬間に冷たさを感じた。彼女は先ほど座つていた場所と同じ場所に座り、俺に渡した物と同じ飲み物を一口飲んで、こちらに視線を向ける。

「ジュースを飲まないって、全く?」

「全然だな。飲めないわけじゃないが、家に買い置きもしてない」

「お菓子は作るのに、ジュースは飲まないんだ」

「大抵、お菓子系統を食べる際はコーヒーか牛乳しか飲まないからな」
ファミリールレストランであるドリンクバーなど頼んでも、お茶やコーヒーしか飲まない。勿体ない、と言われたことがあるが、それらが飲めるだけで俺は十分なのだ。

「じゃあ、スポーツドリンクは?」

「今の季節なら、運動をした際にコップ一杯飲む感じだな。夏以外の季節になると、飲まなくなる」

「・・・単純に甘いものを口にしない、ってわけじゃないんだね」

「ん? どういうわけだ?」

「甘いものが苦手なのかと思つて。芳乃が作るお菓子つて、基本的に甘さ控え目だから」

・・・そういえば、極端に甘いお菓子を渡したことはない気がする。確かに甘い物が嫌いではないが、好んで口にはしない。親が市販のケーキなどを買つてきた際は普通に食べていたが、自分から買うことはなかった。

「渋谷的に、というか食べて貰つてる同じ事務所の人達から、不満とか聞いてないか? こう、あまり甘さが無いから美味しくないとか」

実際、そういう不満があれば使用している砂糖の量などを調節する

必要がある。俺としては満足に作れた物を渡しているが、食べて貰っている人達の好みに合わせるのが良いはずだ。

「んー、そういう意見は聞かないかな。・・・キャンディアイランドのかなこちゃんはわかる？」

「ああ。この前のフェスでも見かけたからな。それがどうかしたか？」

甘さに関しては別に問題ないらしい。しかし、ここでキャンディアイランドの三村かなこさんの名前が出てくるというのはどういうことだ？

「かなこちゃんもマカロンとかクッキーとかお菓子を作って持っているんだけど、甘さで糖分補給出来るお菓子と、軽くお腹を満たせるお菓子と区別出来るから両方食べられる・・・って言えばいいのかな」

・・・どうやら、シンデレラプロジェクトのメンバー内では大まかに分けて2種類のお菓子の差し入れがあるらしい。で、偶然にも味の濃さ等が別なため、それぞれ別々のお菓子として食べられる、ということか。

三村さんが作ったお菓子が本来のお菓子と呼ばれるべきなのだろうが、シンデレラプロジェクト内では異なる種類として受け入れられているみたいだ。

「とりあえず現状は問題ないか」

「ないと思う。むしろ、みんな感謝してるよ」

「それならいいんだがな」

渋谷がこう言っているのだから、彼女を信じるとしよう。最初から疑ってなどいなかったが、やっている以上は気になることなのだ。あのさ、と彼女は言葉を続ける。

「お菓子は作れるのは知ってるけど、料理も出来たりするの？」

・・・そういえば、お菓子のことは話題になっただけだったが、料理の話はしたことがなかった気がする。渋谷は、俺の母親のことは知っているし、別に普通に答えても問題ないだろう。

「作るのが面倒だと思った日はコンビニとかで買ったりはしているが、大体自炊してるな」

「じゃあ学校で食べる昼ごはんも自分で作るんだ・・・」

「余り物を詰める弁当だけだな。前日の夜に作らなかつた日は、行きがけに買っていくようにしてる。家に誰もいないからその日の気分次第でどうにかなるんだよ」

料理自体も慣れるまでは大変だったが、今となつては気軽に作れるようになった。単純に自分が食べたい物を自分好みの味で作ることが出来る、というのは利点の一つだろう。

「・・・渋谷？」

彼女が俺の方をを見る。ただ、いつもの凜とした表情ではなく、狼狽しているような、躊躇っているようなそんな表情。何か、気になることでもあつただろうか。

「・・・芳乃って、一人暮らしなの？」

「・・・ああ、母親のことは話したけど、そういえば言つてなかつたか。親父とは別々に住んでて、今は一人暮らしなんだ」

俺が家から離れた高校に行くことを決めた時、反対もしなかつた親父。毎月、必要以上のお金を振り込んでくれるので、一度だけ少し支給額を減らしても良いと言つたこともあつたが、『余つたら好きに使え』の一言で一蹴された。今思えば、自分には最低限のお金しか使うことしかしなかつた人だったが、他人のためには必要以上に世話を焼く人だ。

「あのさ、今度、何か料理作つてよ」

「それは何だ？俺が渋谷のために料理を作れつてことか？」

「そう言つてるんだけど・・・嫌なの？」

「嫌つてわけでもないが・・・まあ、いいか」

別に断る理由があるわけではないので、受諾しておくことにする。断じて彼女に料理を作ることが嫌だというわけではない。ただ、思うところがあるのは事実だが・・・言わなくて良いだろう・・・あ。

「楽しみにしてる。・・・そろそろ、再開・・・つてどうしたの？何か難しい顔してるけど」

「・・・渋谷じゃないんだが、もう数ヶ月前に島村さんと約束したことが実現していないことを思い出してな」

「約束した相手に良くないと思うんだけど・・・って卯月？」

「そう。島村さんも渋谷と一緒に忙しい身だからな。休日はあるだろうけど、彼女自身の都合で良いと思ってこっちからは日程の話はしてないんだよ」

対象が、ただの学生と高校生アイドルだ。俺の予定よりも彼女の予定で合わせた方が合わせやすいのは間違いないだろう。そう思ってこっちからは話をしなかつたのだが・・・その内に俺の方は忘れてしまっていた。

「明日会うから、卯月に聞いてみようか？」

「・・・いや、いい。俺から聞いた方が良さだろうから、今度それとなく聞いてみるよ」

渋谷を通じて伝えるような急ぎの案件でもないし、俺から聞いた方が良さだろう。電話でもメールでも聞く手段はあるし、彼女からそのことについて連絡があるかもしれない。

しかし、渋谷も島村さんもそうなんだが・・・同じ空間で同年代の異性から料理を振る舞って貰うことや、お菓子作りやらを学ぶシチュエーションって、緊張しないのか・・・？

陽も沈み、真夏の気温が落ち着いてき始めた頃、渋谷家の玄関先にいた。

課題は無事に終わり、自宅に帰ろうかというところだ。彼女の母親から夕飯の誘いを受けたが、やんわりとお断りさせて頂いた。

「今日はありがとう」

ハナコを抱きかかえ、声をかけてくる渋谷。お見送りも別にいらなと言ったのだが、せめてこのぐらいはと譲らなかつた。

「まあ、俺も時間が余つたからな。一人で何かするよりか、こういう時間の方が貴重だし、有意義だと思うよ」

「貴重で有意義なんだ」

「現役高校生アイドルと家で勉強なんて、普通はないだろ。そういった意味でな」

実際にこんなことをクラスの連中、特に男子連中に知られでもしたら、俺は新学期から袋叩きだろう。

「確かにそうだけど……。その前に、私と芳乃はクラスメートで……。友達でもあるんだから。そういえば、特別なことじゃないよ」

「……そうだな」

同じクラスでありながら友人。確かにその通りだ。俺にとって渋谷凪という存在は、同じ学校に通っていて、今年初めて同じクラスになって、偶然にも友人になった。それは間違いない。彼女は微笑を浮かべて言った。

だが、346プロに所属する、今を活躍するシンデレラプロジェクトのアイドル。それも……。確かなことだ。

「じゃあ、今度は学校でな」

彼女の抱きかかえているペットの犬の頭を撫でて、別れの挨拶を口にする。数日後には学校で顔を合わせるんだから特別な言葉は必要ない。ハナコは吠えることもなく、おとなしく撫でられていた。

「うん。それじゃあ」

今思えば、彼女が友人だと言ったのは、初めてではなかっただろうか。彼女の方からそう言ってくれたのは嬉しいことに間違いない。

それなのに

俺は彼女を今さらのように遠い存在として見ようと、接しようとしている。でもそれはきつと正しいはずだ。

だって彼女は、俺みたいなただの学生とは違う、多くの人から支持されているアイドルなのだから。

第11話

季節は夏の暑さが治まり、木々の葉が紅葉し始め、外の景色が違って見え始めた頃。

季節が変わり始め、今日の気温は平年より低めらしい。いつも天気予報だけは調べる癖がついているのが、こういう時に役に立ったなとふと思う。必要あるかはわからないが、念のために手袋を忍ばせた置くことにしよう。

既に学校は放課後の時間帯を迎えた。

二学期が始まってからと言うもの、シンデレラプロジェクトのメンバーは忙しさを増しているようで、休日はレッスンやイベントで出演してるらしく、同じクラスにいる彼女とも学校の中でこそ会話は交わしてはいるが、それ以外で接する機会はほとんどなかった。そのシンデレラプロジェクトの一員でもある彼女、渋谷凜は、自分の席に座って外を眺めている。いつもであれば、授業が終わった後すぐにでも教室を出るのだが・・・その視線は窓に向けたまま動かない。今日は休みなのもかもしれないが、その時でもこうして外をじっと眺めているのは、彼女の初めて見る姿だ。

島村さんによれば、美城常務、という外国から帰国した人が、アイドル部門全プロジェクトを白紙化にするということを知り、帰国早々に宣言したらしい。だが、その発言に反対意見を出したのが、俺との面識もあるシンデレラプロジェクトのプロデューサーだという。そのプロデューサーが白紙の代替案として企画したシンデレラの舞踏会、とこの実現させようと日々忙しい毎日を過ごしている、とのことだ。

常務という役職が具体的にどこまで位が高い地位なのかは知らないのだが、少なくともプロデューサーよりは上の立場だろう。そんな人が思いつきで発言したのではないだろうし、何かの思惑があることは間違いない。実際、城ヶ崎姉の方が化粧品品の宣伝とのタイアップしているポスターを見たことがある。恐らく美城常務が提案したものだ判断しているのだが、今までとは違った城ヶ崎美嘉というアイド

ルの魅力をアピール出来ていたと個人的には思っている。それが本人がやりたい仕事だったかどうかは別として、と付け加えるが。まあ、その美城常務の意見が絶対というわけではないだろうし、島村さん達がプロデューサーを信じているのであれば、そちらの方針に従っていけば間違いはないだろうと思っっている。

俺が知る彼女達の近況としてはこんなところだ。

そんな事を思い返している間に、自分の帰宅準備が整う。視線の先の彼女は、相も変わらず動く気配がない。そんな姿が心配・・・というわけではないが、気になるのは事実だ。放課後になつてることを気づいていないわけではないと思うが、声をかけるくらいはいいだろう。そう思い、席を立ちあがり、同じクラスのアイドルに近づいた。それでも、視線がこちらに向くことはなかった。

「今日は事務所に行かないのか？」

そう声をかけると、ようやく彼女の視線がこちらを捉える。声をかけた相手が俺だと認識すると、体ごとこちらに向き直した。

「・・・今日はオフだから」

端的に返答を返す渋谷。と、同時に帰宅準備を始める。・・・本当に放課後だと気づいてなかったんじゃないだろうか。

「・・・今日つてさ、時間ある？」

荷物を鞆に詰めて立ちあがった後、問いかける声が耳に届いた。用もなければそんなことを伺いはしないだろう。ただ、どうも一緒に帰るだけだとか、そんな空気ではない。彼女なりに何か用事があるということだ。・・・それも、明るい話、というわけではなさそうだ。

聞いた話を要約しよう。

プロジェクトクローネ。「かつての芸能界のようなスター性、別世界のような物語性の確立」

346プロのブランドイメージの確立の第一歩として、美城常務がプロジェクトを立ち上げたという。

各部署の垣根を超えたプロジェクトらしく、俺と直接関わりがあるシンデレラプロジェクトもその対象に入っており、秋の定例フェスに向けて、美城常務自らメンバーを選定しているとのことだ。

そしてそのメンバーに、渋谷は選ばれた。ただ、ニュージエネレーションとは全く別のユニットの活動を予定してあるとのこと。その話を聞いた段階では、渋谷は自分のユニットがあるからと断ろうと思っただけ。ただ、同じユニットに選出されたほかの二人のメンバーは、まだデビューもしておらず、この話を断るとデビューが先送りになるのではないかと危惧しており、結局、その場では断ることは出来ず、結果は保留となった。

以上が、彼女から聞いた話を自分なりにまとめた内容だ。そして、この話・・・彼女なりに考えた結果、新しいユニットの方は断るつもりでいるらしい。

「渋谷がちゃんと考えて結論を出したなら、それで良いんじゃないか？」

一通り彼女からの話を聞いて、思ったことは実にシンプルだった。ニュージエネレーションはまだ結成して半年も過ぎていない。まだこれからって時に、わざわざ別のユニットと掛け持ちすることもないだろう、と思う。それと同時に、渋谷が別のユニットを組むことに積極的だったなら、それもまた賛成はしていた。彼女自身がどうしたいかをちゃんと考えられていれば、彼女の選択を後押しするのが一番良いだろう。

「芳乃の考えはどうなの？」

「さっき言った通りだ。渋谷が考えた結論なら」

「それは私の考えを後押ししてるだけ。芳乃自身がどう思ったか、聞かせて欲しい」

「・・・俺の意見なんて参考になるとは思えないが」

「参考になるかならないかじゃない。私が芳乃の意見を聞きたいの」

何故、そこで俺に意見を求めるのか。渋谷と俺では、考え方も、思

考も、生活している環境さえ違うのに。

だが、そこまで言われてると、流石に言わないわけにはいかないだろう。彼女より二、三步先に前を歩いていた俺は、後ろを振り返る。ここから彼女と別れる道までは直線なため、足を止めることはしないが、歩く速さは少し遅くしながらも、夕日の陽を背に、彼女と向きあう。

「一つ、確認させてくれ。新しいユニットに参加した場合、美城常務は既存のユニットを解散するとは言ったか？」

「ううん。既存のユニットを解散するとは言ってなかったよ」

「・・・ニュージエネとして今後も活躍することに、反対はない。それは本当。ただ、両立と言った形で、違うユニットとして活動する、っていうのも別段悪いことじゃない、とは思う」

「それは・・・どうして？」

「実際に会ったことがないから性格云々は知らないが、美城常務の提案そのものに良いイメージを持っているからだ。本人がやりたいか、やりたくないかという気持ちの問題はあるだろうが、ニュージエネとはまた違ったこととか、新しい何かを経験出来る機会だ。その機会を逃すのは残念ではあるな」

新しいユニット、違うメンバーとの活動。苦労も多いだろうが、その分何かを得ることが出来るだろうとは思う。ニュージエネの活動自体はもちろん減るだろうが、解散だとか、活動休止だとかそういう話は出ていないのであれば彼女にとって悪い話ではないだろう。

「ただ、さつきも言ったがニュージエネだけで活動することが何も変化がないわけじゃないだろうしな。結局、渋谷の気持ち次第になるんだよ。俺が実際に経験してるわけでもないから、推測で話すしかないんだ」

「・・・それでも良いよ。私が我儘を言って、聞いたんだから。言ってくれてありがとう」

どちらにせよ、対象となる相手とは話をしないといけないだろう。スムーズに話がいけば良いが、新ユニットを断るとなれば、デビュー前の二人からすると、せつかくの機会を失うのだから簡単に物事が進

むとは思えない。新ユニットの参加を希望したなら、島村さんと本田さんが困惑するような話だ。

彼女からの言葉に返答することなく前を向くと、渋谷と俺の分かれ道となる場所に二人が立っていた。

あつ、と隣に並んだ渋谷が小さく声を漏らす。それだけで、数歩先の目の前の二人が、知らない人ではないことがなんとなく伝わった。そしてそれは、俺にとっても例外ではなかった。

「凜」

夏にあつたライブ。あの時に見かけた姿を、ここでもう一度目にするととは思わなかった。隣にいる渋谷を名前前で呼んだあと、視線をこちらに向ける。病院にいた時と体型などは変わったように見えないが、あの時よりも健康的だと思える。

「それと・・・久しぶりだね、芳乃」

「・・・元気そうだな、北条」

渋谷に話がある二人は、場所を変えてハンバーガーショップに移動することになった。俺はこのまま帰ろうとも思ったのだが

「凜がアイドルってこと知ってるんでしょ？だったら、聞いても問題ないよ」

と、北条に言われ、そのまま同席することになった。（渋谷にも確認したが、承諾された）

・・・聞いた話を公言するつもりもないが、聞かれても問題ないという信頼はある、と思っっているのか。

北条加蓮の友人は、神谷奈緒という名前らしい。あの夏のライブの際にも彼女と一緒にいた人だろう。

正面から初めて神谷さんを見たが、眉毛が気になる。ここまで女子で太い眉毛の人は見たことがない。・・・本人には言っていないが。

各々好きな物を注文して、席に座る。俺よりも先に座っていた神谷さんが注文したハッピーセットの景品を触っている。景品は何かのフィギュアなのだが、対面側にいる俺の視線を気にせず触っているところを見ると、買った本人が欲しかったのだろう。

「奈々緒、芳乃が見てるよ」

と、続いて買った商品を手に持ってやってきた神谷さんの隣に座りながら声をかける。はっ、とした表情でこちらを見るフィギュア好きと思われる少女。

「こ、これは・・・だな・・・」

「・・・別に引いたりしてないですから。気にしないでください」

別に個人によって好きな物や事など異なるのだから、否定する気もない。クラスメイトにアイドル大好きだと公言してる人もいる、なんならアニメやゲームが好きだって自己紹介の時に堂々と宣言したのもいる。

「そ、そっか。というか敬語は良いよ。あたしだけに敬語つてのも気が引ける」

「了解。神谷さんがそれで良いなら」

「あんまり気にしないかもしれないけど、一応、奈緒の方が年上だからね」

「・・・覚えとくよ」

渋谷や北条と同年齢だと思っていたが・・・違ったのか。流石に高校生だろうから1, 2歳の年齢差だとは思うのだが。ただ、人は見た目によらない。シンデレラプロダクションの新田美波というアイドルがいる。

直接会ったことはもちろんないのだが、映像や雑誌で彼女を見かけた時、アルコールが飲める年齢だと思っていたからだ。本人に直接会うことがあつたなら、素直に謝ろう。

それからすぐに渋谷も合流して答えを伝えるべき相手と向き合うように座る。答えの内容を知っている俺でも、ここからどういう事態になるか、というのは想像出来ない。完全な第三者なため、話を振られた際は答えようと思うが、出来るだけ本人達にまかせた方が良いだ

ろう。

「色々考えてみたんだけど、私は参加できない」

そう、渋谷は結論だけを告げた。

「そうだよね。凜にはニュージエネがあるもんね」

二人とも渋谷の立場を理解はしているはずだ。既存のユニットとは違う別のユニットとしての活動が、島村さんや本田さんの活動の弊害になるかもしれないことは。

「でも、私、このチャンス逃したくない。奈緒と凜と3人でもつと歌ってみよう」

それでも、北条は勧誘を諦めない。渋谷が難しい決断をしたのだと理解しながらも、相手の目を見てはつきり自分の思いを言葉にした。

「この3人ならきつと凄いいことが出来る。そう思えた。」

・・・明日レッツス室に来て。もう一度この3人で合わせてみようよ。そうすればきつと分かる」

北条加蓮という人物と関わった期間というのは、決して長い期間ではない。人をからかったりすることはあるが、でまかせや思いつきで発言することはなかったと思う。・・・北条がそれだけ本気だということとは、俺でも伝わった。ほかの二人にももちろん伝わっているはずだ。なんとなくだが・・・ここに来るまで、彼女もその意思を持っていたし、渋谷なら断るだろうと思っていた。ただ、今の彼女の表情を窺えば、どう返答するかなんてわからない。だって隣にいる彼女は、誰もが見ても迷っていることがわかったから。

「話したいことがあるんだけど」

そう、北条が店を出る前に一言声をかけてきた。別に断る理由もないため、帰りながら話そうという結論に至り、途中まで一緒だった神谷さんと別れ、今は北条と二人で帰り道を歩いている。

考えさせて欲しい。

渋谷が出した結論は保留であった。結果的に、新ユニット結成の可能性が残るという結果になった。・・・、その気のなかつた彼女が保留の返事をしたのは、北条と神谷さんの二人と組むユニットに、ニュージエネレーションにはない何かを、渋谷も感じ取っているのだろう。今頃、自分が後悔しないために、結論を出すために考えているはずだ。

「・・・私は賭けてみたいんだ」

ちやうど歩道橋の階段を上がり始めたところで、前を歩く北条が、こちらを振り返る。自然と見上げる状態になる。

「私と奈緒を感じた何かは、本物だって信じてるから。・・・って、芳乃に言ってもわからないよね」

「部外者の俺にはな。・・・ただ、渋谷だって北条の言う何かを感じたんだろう。だからこそ、迷ってる」

ニュージエネレーションでは体験できない何か、彼女はそれを事前にかけていたのだろうか。それを、今日北条が口にしたことで、改めて実感したのかもしれない。

「もし、私たちの誘いを受けて、明日、凜がレッスン室に来くれたら、トライアドプリムスは結成するはず」

「そのトライアドプリムスってというのがユニット名か」
「うん。もうユニット曲だってあるんだから」

そう話す加蓮は、嬉しそうで、楽しみにしているようだ。初対面同士の会話というのは、互いに警戒なり探り合いなりするものだと思うが、病院で俺に初めて会った時の北条の警戒心が特に強かった気がする。

「なんかじつと見てるけど、私の顔に何かついてたりする?」

「そういうわけじゃない。病院で会った時の頃と比べると、楽しそうだなって思ってたな」

「初めて会った時の頃は思い出さないでよ・・・。確かに、話しづらかったのは私のせいだけだよ」

自覚あったのか、とか、意図的にやってたのか、とまでは言わない。それ以上言うと手とか足が襲い掛かってきそうだったからな。

「・・・で、話したいことってなんだ？」

「あーそうそう、話したいことはね」

考えを悟られると嫌な予感がしたため、こっちから話題を振る。今までの内容が北条の言う話したいことであるならば別だが、それとは別に何かあるんだろう。・・・と話題を振ったのはいいのだが、どうも嫌な気しかない。それも彼女が一步こちらに歩みよって、互いの手が届く距離にあるからだろうか。

「芳乃宛にメール送ったんだけど、届かないんだよね。どうして？」

「・・・高校進学する前日に紛失したんだ。その際にアドレスも新しいのに変更した」

なるほど。確かに、北条とは連絡先を交換していた。内容は、「お菓子作ってー」と送ってくるのが大半だったが。

「・・・そう。あと、家に行ってもいつも留守なんだけど？」

「高校進学してから俺だけ引越したからな。親父が家にいるだろうが、出張やら家にいるのが夜しかないから、留守なもの仕方ないな。北条と連絡を取ろうにも、アドレスなんて覚えてないし、家なんて知らなかったからこっちから連絡を取る方法がなかったんだよ」

嘘を言っているわけではない。実際、前に登録していたアドレスが全部登録出来ているわけではないし、不便なこともなかったから調べることもしなかった。連絡をしないとイケない事態が発生したら調べたとは思うが。

「それで・・・私に、何か言いたいことある？」

「今度、好きなだけフライドポテトを奢る。それで許してください」

「ダメ。あと、私が頼んだ時にお菓子も作って」

「・・・わかった」

約束だからね、と念を押して彼女は階段を上がっていく。圧の強さに負けて謝った上に、振る舞うことが確定した。俺が悪いこともあるし、二つのことで許してくれるなら良しとする。これくらいのことなら大して苦にはならないしな。今から、材料の買い足しにでも行ってもいいかもしれない、と思い立ったところで風が髪を揺らした。平年よりも寒いと言っただけあり、確かに肌寒さを感じる。それは目の

前の北条も一緒らしく、くしゃみをした後、体を震わせていた。流石に目の前でくしゃみをされると、俺よりも寒さを感じてるんじゃないかと思う。念のためと入れておいた手袋を取り出して、隣に並んだ。「使うか？」

「・・・いいの？」

「まあ、目の前で寒そうにしてたらほっとくわけにもいかないだろ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

手袋しなくて風邪を引きました、なんてことはないだろうが手袋をはめて損はないだろう。手袋をはめた彼女は両手を合わせて感触を確かめている。以前、母親から聞いた話ではあるが、体調を崩しやすく入院を何度かしたと話を聞いている。今となっては心配しすぎることもないと思うが、せめて近くにいる時くらいは気にかけても罰はあたらないよな。

「ねえ、芳乃。お願いがあるんだけど」

「俺に出来ることなら良いけど、何だ？」

「今度、芳乃のお母さんに挨拶させてよ。あの時、お世話になったから」

「・・・ああ。母さんも喜ぶよ」

俺には何も出来ないが、出来れば彼女たちが納得して前に進めるような形になれば良いなど、そう思うことしか出来なかった。